異世界で物書き

Ryuui

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界で物書き

【Ｎコード】
Ｎ９６３８Ｘ

【作者名】
Ｒｙｕｕｉ

【あらすじ】
気が付いたら異世界でした。中世ヨーロッパ風で、どうやら剣は現役、魔法みたいなモノもありました。「ファンタジー万歳！」と三十路手前の男は喜びました。ですが、心は少年の様にはしゃいでも、肝心の体力がついて行きません。現代社会で仕事に追われ続けたその男は、泣く泣く冒険活劇に見切りを付けます。「それならば！」と、現代社会では叶えられなかった職業を目指し方向転換、異世界での夢は叶いませんでしたが、現代での夢を叶える為に、叶え続ける為に頑張ります。力はありません。魔法みたいなモノもあ

んまり。けれど偶に、文化速度の差と、環境意識の差と、日本人的凝り方で、何かやらかすかもしれません。そんな一応、異世界日常系、それでは開幕の時間と相成りました。

1話　日常で到来（前書き）

初、小説です。稚拙ですが暇潰し程度になりましたら幸いです。

1話　日常で到来

「ふぅ…」

男が溜息を付く、先程から同じ事を繰り返している。
太陽は真上に昇ったのだろう、もう窓からは陽は見えない。

「参ったな、本当に参った」

こぼした言葉に何の意味も無いけれど、出さずにはおれない
そんな感じでまた、溜息を付く。

事の始まりは、彼の友人が言ったモノから動いた。

「ねぇ先生、いい加減コレどうにかしてよ」

先生と言われた３０過ぎの男は、そこで筆を止める。
男が目を上げた先には、１６歳くらいの金髪碧眼の小柄な少年が、
本の山を崩さぬようにこちらに近づいて来ていた。

「来ていたんですね、おはよう」

少年の髪と目の色は、この国では有り触れたモノであるが
その造形が一線を画していた。
同性でも振り返り見てしまうであろう、均整の取れた理想的な配置に、
乙女達が夢見る『王子様』の見本が現実に出てきたのかと錯覚する程である。

「おはよう、じゃないよ。もうとっくにソール様は真上に来てるって」

外の方を見ると、太陽はもう窓から見えなくなっていた。
どうやら仕事に没頭し過ぎて時間の感覚が見えない様だ。

「もうそんな時間でしたか、なるほど、お腹が空く訳だ」

「また、徹夜したの先生！？」

「いえね、この切りの良い所まで書こうと思っていたら夜が明けてたんですよ」

「いい加減にしないと、死んじゃうよ！」

そう言いながら、少年が手持ちのバスケットから食べ物を取り出そうとして手を止める。

「あぁ！この前片付けたのにもうテーブルが消えてる…」

「ちゃんとソコにありますよ？」

男が指さす場所にはいくつもの本の塔。辛うじてテーブルの木目が見え、これがテーブルだと解る。

「あーもー！これ全部撤去しちゃうから！」

「ああ！待ってください、まだ資料として使ってますからそのままそのまま」

「ダメ！ご飯食べれなくなるから！」

ぶつぶつ言いながら、男を無視して本を移動する。
結局は別の山が成長しただけなのだが取り敢えず、である。

テーブルに置いたバスケットから、昼食用のサンドイッチを取り出し並べる。
男は机から腰を上げて背筋を伸ばすと、面白いくらいに音が鳴る。
自覚はなくとも身体は正直で、お腹も鳴り始めた。
少年がおかしげに笑いながら「ちゃんと体調管理はしないと」
などと言われても当人はどこ吹く風で気にしていない。

「何時もはちゃんと食べてますよ。
偶に忘れるだけですって」

「怪しいなー、ほんとかなー」

「そんな事より、折角出してくれたんですから
食べましょう食べましょう」

これ以上追求しても昼食が遅くなってしまうので、
少年も会話を一旦止めて水筒を取り出し、二人分用意する。
「なんとかしないといけないかな…」
呟く少年は正面を向き、気持ちを切り替える。

「恵みによる糧を口に出来る事、感謝致しますソール様」

子供っぽい所が抜けきらない歳の少年だが、祈る姿は堂に入っている。
そんな少年を微笑ましく思いながら、男も短く「いただきます」と食前の挨拶をして
サンドイッチに手を伸ばす。
食前の祈りさえ終わってしまえばいいのか、少年が会話の続きを切り出す。

「ね、先生。いい加減何とかしようよ」

「何をです？」

食事時の会話はマナー違反であるが、ここには二人しかいないのでお喋りが続く。お互い黙って食事をするより楽しいからだ。

「この本の山、これじゃ家を任せた意味ないよ」

「ふむ、しかし、私の仕事柄、こうなってしまうのは、必然でありまして、それになかなか忙しく…」

男が住んでいるこの家は、元々が少年の持ち家であり
現在は男が借りて住んでいる。持ち主に突っ込まれると、とても弱い。

「まぁ、先生には新作早く出して欲しいし。
そこでね…」

なんだか、よくない流れを感じた男は生きる道を探すが
いたずらを思いついたかの様な、飛びっきりのイイ笑顔で少年が言
葉を続ける。

「掃除する『人間』が必要だよね！」

「ふぅ…」

何度思い返しても逃げ場はなかったのだと諦める。
そもそも男には選択肢はない。この家の所有者は彼の少年であり、
男が前の貸し家を追い出され途方に暮れていた時に「家の管理をす
るのなら」と
条件付きで、しかも格安にて空家を紹介してくれたのだ。

人が住まなくなれば、家の耐久年数は加速度的に短くなる。
しかし、男が仕事に精を出せば本の山が生まれ部屋が埋もれていく。
実際、家の管理どころか自分の健康管理すら放棄して、仕事に没頭
する始末である。

「住み込みって所がな。一人の方が気楽なんだけど、
なんとかして、せめて通いにして貰うか…」

一人で生活していた時間が長かった為か、同居人が出来ると言う事に
抵抗感が働く。つまりは、いい歳をして他人との近い付き合いが分からないのだ。

今は没頭すべき原稿に筆を置き、男はある人物を迎える為
玄関のホールにいた。その背中はもう既に煤けて見える。

「もうそろそろ時間でしょうかね、確か到着の時間は」

そう呟いた時、玄関扉からノックの音が響いた。

「あ、はい、今開けますよ」

ノックに返事をしつつ、男が扉を開け放つ。
玄関先には女性が一人、ニコリともせず無表情で立っていた。

「本日からこちらでお世話になる、アイリと申します。以後よしなに、
フミアキ様」

アイスブルーの双対の宝玉に、一瞬見蕩れるが慌てて意識を戻す。見蕩れたアイスブルーが、余りにこちらを冷たく射抜いてたからだ。

「こんにちわ、初めまして、この家の一応主？のフミアキと申します。
あ、主と言いましてもここ、借家ですからね、おまけに私、平民ですし
堅くならず、気軽にしてください―…」

あはははー…と乾いた笑いにも、やはりアイリは無表情だった。
完全に滑ったと凹みつつ、まだ挨拶だけの自分に活を入れる。

「それでは中へ、遠路遥々お疲れでしょうお茶でもお出しします」

「結構です、お茶などメイドである私の仕事です。キッチンの場所だけ
御教え願えますか」

ピシャリと言い放つアイリに、フミアキは気圧される。

「いきなり仕事もないんじゃ？今日は着いたばかりですし、一日ゆっくりしても」

「我が主より、「まずは掃除！」と言伝されております」

「はぁ、そうですか…」

三度肩を落として、諦める。彼女は少年の刺客なのだ、ならばもう好きにさせるしかない。
項垂れながら、「案内します」と言うフミアキに、アイリは無言でついて行く。
館の中を順に案内していると、段々アイリの表情が険しくなっていく。
初めて感情らしきモノを見たな、と呑気な事を考えるフミアキだったが
最後に、自分の書斎を見せたらアイリに館から追い出された。

「よくわかりました、わかりましたので暫く外で待っていて下さい」

有無を言わせない迫力と、凍えるような双眸がフミアキを貫く。
どうやらアイリは、館の現状に大変ご立腹のようだ。今の彼女はこれから
戦場に向かうと言わんばかりの気迫を持って、立っていた。

（なにこれ、こわい）

ここに上下関係が、決定された瞬間だった。

1話　日常で到来（後書き）

ご意見、ご指摘ありましたらお願いします。

2話　猫で犬（前書き）

この作品には厨二的な表現が多分に含まれています。
アレルギーのある方は戻るボタンを押して戻ってください。

2話　猫で犬

魔窟掃討作戦（アイリ談）より、2週間が経った。
以前とは見違える程の書斎にて、以前と変わらず執筆中のフミアキ。
床に直積みの本達は、新たに作られた壁の本棚に綺麗に整頓されている。

「金持ちって怖いなぁ」

そう呟くフミアキだったが、館からフミアキが追い出されてからアイリは家具職人を呼び出し、書斎の壁に本棚を作らせ本の山を処理した。
出来上が立った本棚は、上質な木材と丁寧で繊細な細工まで彫られており
職人の腕の良さを窺わせる一品と仕上がった。
一目見て一流の仕事と判断出来る本棚の出来に、フミアキは歓喜したが
瞬時に自身の経済状況、即ち財布の中身を思い出す。
怖くなって小声でアイリに聞くと、「全て、我が主の計らいです」と言われた。

「この家も随分綺麗になったし」

館の掃除に掛り切りになる事5日、館の設備に屋根の修繕に7日ちょっとしたリフォームが終わったのは先日である。

よくここまで手を付けずに過ごしましたね、とアイリからお叱りを受る羽目になった。

「悪い人ではないのは分かるんですが、怖いんですよねぇ」

初日のインパクトに、館の管理不足からくる罪悪感
ましてや、あの少年の紹介なのだ、逆立ちしても頭が上がらないし
アイリの給金に関しても少年持ちである。

「あの子にお世話になりすぎて、返せる恩の宛がない」

ここの所の急激な環境の変化と、少年への積もった大恩に筆が止まり思考が飛ぶ。
気が付けばアイリが隣に来て、お茶を注いでいた。

「あの、アイリさん、何時の間に、こちらに？」

「ノックをしても返事がなかったので、勝手に入らせて頂きました」

と、しれっと答える。
気配もなければ、優雅に注ぐ所作にも音がない。
ふわりと紅茶の香りが鼻をくすぐり、匂いだけでも上質な茶葉である事が窺える。

「ありがとうございます、この家にはお茶っ葉はなかったと思いますが、どうしたんですか？」

「買って参りました」

「はぁ、しかし、随分高そうですね」

「我が主より、お世話に当たり抜かりない様、仰せつかっております」

「お、大袈裟ですね」

紅茶を啜ると、会話が途絶える。
どうにも会話が続かない、他所のメイドさんとやらもこんな感じなのだろうかと思うも
怖くて聞けないフミアキだった。

窓から流れる初夏の風に、紅茶の湯気が揺れる。
暫く無言で紅茶を堪能するフミアキに、珍しくアイリが話を切り出す。

「…フミアキ様は、我が主とはどういったご関係でしょうか」

「あれ、何も聞いていませんか？」

「主より、執筆に滞りなき様、便宜を図ってほしいとの事でした
推測は立ちますが、貴方様の口よりお聞きしたい」

「そうですね…、読者であり、友人であり、そして――命の恩人と
言った所でしょうか」

この言葉に、アイリはじっと目を細めるもどこか得心がいった顔
をした。
少年と知り合う切欠となった出来事は、フミアキの名を良くも悪く
も広める結果になったので
彼に近しい人物なら、今の説明で事足りるだろう。

「彼に仕える貴女からすれば、私なんぞには関わり合いを持って欲
しくない、
そう思うのはしょうがない事だとは思いますよ」

――すみません。と、どこか自虐的な笑みを浮かべる。

「確かに関わってほしくありませんが、個人としましては――」

バタン！と唐突に書斎の扉が開け放たれる。二人の視線が扉の先に注がれる。

「すごい！あの部屋が綺麗になってるー！」

興奮気味に感想を口にする少年、あの本の山を見ている者からすれば
現在の書斎は別モノだろう、口を酸っぱくして注意してた少年からすれば一塩かもしれない。

「アイリ、よくやった！」

「はっ、恐悦至極に存じます」

「ふっふっふ、僕の見立てに間違いはなかった、
やっぱりアイリを送り込んだのは正解だったね！」

「…送り込まれた方は、大変でしたよ」

「何言ってるの、先生がちゃんとしないからだよ！」

ぼそりと呟いた言葉を聞き逃さず、直ぐ様フミアキの文句を両断する。
怒った様に言う姿は、年齢よりも幼く見えて愛らしいと思う他ない。

「もしイヤだったら、これからはきちんと整理整頓！」

「そうですね、これだけ綺麗にして貰ったので、汚すのに抵抗が出る様になりました」

――うんうん、そうでしょそうでしょ。と得意気に頷く少年を見るフミアキだったが、
ここから逆襲が始まる。最近押され気味なのだ、少しくらい仕返しをいや、2週間お世話になったお返しをあげなくては。思いながら、唇が僅かに上がる。

「えぇ、そうですね、これからは掃除にもっと力を入れるとしますただ、掃除に専念しすぎて新作が遅れるかもしれませんが、そこは容赦してくださいね」

その言葉を受けて、一瞬にして固まる少年。先程まで絶頂にいただけにあって
今の奈落に落とすに十分であった。言い返したいけれど言い返せない、少年に取っては
死刑宣告に等しい。無言のまま、その内、目尻に涙が溜まっていく。

このやり取り自体、二人に取っては何時もの事である。
少年がフミアキに説教をする、フミアキが反撃する、少年がやり込められると泣きが入る、
フミアキが土下座する。が一連の流れになる。

今回は連敗が祟ったせいか、伝家の宝刀まで抜いてしまったのだ
彼の機嫌を治すには、どれだけの土下座がかかるか少し後悔が入るも
目まぐるしく表情の変わる少年を見ていると、またやってしまうのが困りものである。

そんな何時ものやり取りであるが、フミアキは重大な事を失念していた。
ここには二人だけではない事を、そして彼の少年を主と仰ぎ、忠誠心厚きメイドがいる事を。

少年いじりを堪能しつつ、そろそろ土下座と謝罪の体勢に入ろうとした矢先
フミアキの足が止まる、止められる。足の踝まで『氷』が張っている。

「我が主の涙、貴方様の命より安いと思わない事です」

普段の澄んだアイスブルーの瞳が色濃く染まる、彼女の手は空中

に踊り方陣を描き
空陣からは漏れる燐光は、篭めたる力の大きさを物語る。

――あ、死んだ。直感で判断すると、アイリに向けてた視線を少年に戻す。
命を握るアイリから目を反らすのは完全なる自殺行為であるが、少年に伝えるべき言葉を残す。

「クーエンフュルダ、貴方は私の一番の読者であり、大切な理解者でした。
心残りは、受けた恩を返せなかった事謝ります」

「なんで過去形、先生死んじゃうの？！」

「いや、これ、もう、積んでるでしょ。腰まで凍ってきてますよ
『形ある紋言』を使わずに、コレですか」

――すごいですね。などと呑気に話してるが、心臓まで達したら本当に生命活動に支障が出る。

「ちょっと、ちょっと！アイリ止めてーーーーーーーーーーーーーー！！！」

「クーエンフュルダ様を泣かせるとは、極刑モノです。省略して私が執行します」

「僕、泣いてないよ?!それよりこれだけで先生死んじゃうの?!」

「あ、この状況、このアイデア、次回のネタに使えるか?」

「ちょッ!?先生もうちょっとで本当に拙いんだよ!?危機感持ってよ!!」

「もう、末後の言葉も伝えましたし、いいかなぁーとか…後、大分感覚なくってきました」

「いいかなー、じゃなーーーーーーーーーーーーーーい!!!」

「さてと、時間と相成りました」

胸まで氷が達し、フミアキの首がカクんと落ちる。それまで真っ赤になっていた
クーエンフュルダの表情が入れ替わる、人形の様な感情の持たない人型がそこにいた。

「アイリーン、本気か？」

「どんな処罰も覚悟しております、ですが、この男の存在はひ…」

言い終わる前に口が止められる、部屋には無数の方陣が舞う事に寄って。
鉄火場に置いても途切れる事のないハズの鋼鉄の意思が、部屋を覆い尽くす力に
当てられ途切れそうになる。

無言のまま、クーエンフュルダは描いた方陣に力を更に注ぐと
フミアキにまとわりつく氷が砕けていく。
しかし、フミアキの意識はまだ、戻らない。
息を深く吸う、クーエンフュルダのエバーグリーンの瞳がブラッドレッドに染まる。

「黄神、最神、天命神、逆風吹きて誰彼の、夕星、入星、宵闇星、
迷い彷徨い宵の口
帰れぬ黄泉道に不憫ぞ一縷、古鐘、神鐘、魂釣鐘、御神のみてぐら
落下傘、空瑠璃空瑠璃鳴り響け」

クーエンフュルダの口から、『形ある紋言』が紡がれる。

「――――　『ゴードベールドの福音』」

部屋に散らばる方陣から、光の奔流が解き放たれる。
同時に部屋いっぱいに音が満ちる。低く、高く、激しく、静かに、全ての『光』と『音』がフミアキに降り注ぐ。
しかし、まだ目を覚まさない。顔色は元に戻っているが、意識がないようだ。
クーエンフュルダは、更に力を篭める。絶対に助けるのだと言いたげに。

見守っていたアイリがここで溜息混じりに動く。

「失礼」

短く言い切ると、フミアキの上体を起こし、『当て身』を食らわせる。

「アイリーン、まだ…ッ」

――何かするつもりか。と、問う前に、フミアキが小さな呻きを上げた。
そこでようやく方陣の稼働が止まる。長い息を吐き、安堵の思いが胸を満たす。
安堵と一緒に「何故？」と言う疑問が湧き上る。あの方陣は、クーエンフュルダが持つ

最高の治癒陣であり、その効果は自身が使い数多くの人間を救ってきた事で、証明されている。

「アイリーン、何故私の治癒陣が効かなかった」

答え難そうにするも、主人の目が答えを促す様にこちらを見据える。

「はっ、偏に……――過剰でございます」

「は？」

若干間の抜けた声が出る。それでも、アイリは説明を続ける。
曰く、最上級の治癒陣が必要な状態ではなかった
曰く、氷は表面に張っただけで単に気絶、殴れば起きる
曰く、過剰な治癒陣で逆にフミアキの命が危なかった、等々
アイリの話が続くにつれて、どんどんクーエンフュルダの顔が赤くなっていく。

「きゃーーーーーーーーーー！！！それ以上言わないでぇぇぇぇーーーーーーー！！！」

「前から思っておりましたが、少々方陣に頼り気味かと存じます」

要は、焦ったクーエンフュルダが混乱して状況を把握、確認せずに感情のまま力を奮って、墓穴を掘った。そんな公式がクーエンフュルダの頭に浮かんだ。
恥である。

「うぅ…つつっ、なんだこれ、気持ち、悪い…うぇ」

やっとのようで意識が覚醒するも、頻りに頭を振っているフミアキ。
意識が飛んでいた為、部屋を見渡す。
頭を抱えて座り込むクーエンフュルダと、何時も通り背筋を伸ばして立っているアイリ。

「あの、えーっと…、何が起こったんですか？」

「あ！！先生無事だったんだね！！」

――よかった！と言いつつクーエンフュルダがフミアキに駆け寄ってきた。
そして、アイリと一緒に氷からの経緯を、軽く話して謝罪する二人。
心底申し訳なさそうに謝る少年と、何時もの無表情で謝罪を口にするメイドさん
その対比に少し笑ってしまうフミアキだった。

「アイリ！もうちょっと真面目に謝ってよ！！」

「いや、いいんですよ、クー」

「よかないよ、本当に危なかったんだよ！…主に、僕のセイなんだけど…うぅ」

「私を助けようとしての行動だったんですから、そんなに気に病まないでください」

少年をやんわり慰めるフミアキの顔には、殺されかけたハズなのに負の感情が欠片も感じられない。作り笑いでも、感情を押し殺す様にも伺えず
そんなフミアキを見るアイリは、その目をじっと細める。
アイリの視線に気づいてか、フミアキがアイリの弁護をする。

「あの出来事から、今でも教導院に睨まれていますからね、
いくら貴族の君とは言え立場を悪くする、アイリさんの心配は最もですよ」

「またそうやって他人の心配するッ、先生は、もっと自分を労わるべきだよ！」

「そうですね、次からはもっと気を付けるとします」

はぐらかす様に答えるフミアキに、反駁し口を開も直ぐ様閉じられる。
何故なら、フミアキの顔色は青を通り越して白くなっていたからだ。
健常な人間に最大の最高の治癒陣でもって、クーエンフュルダの常人より
遥かに強い力が遠慮なく注がれた為、福音の力がフミアキの身体の中行き場をなくし暴れてるのだ。

「先生！本当に大丈夫なの？！」

「不味いですね、急いで処置を――…」

二人の遣り取りを聴きながら、フミアキは前のめりで倒れる。
今度は、自らの意思で意識を手放す。実を言うとフミアキは限界でいっぱいいっぱいだったのだ。

2話　猫で犬（後書き）

1週間に1話を目処に頑張ってみます。
ご意見ご感想お待ちしておまります。

3話　昼で夜

一日の内に二度死にかけた事件から三日目、
フミアキはまだベットの住人でいた。
クーエンフュルダの力が強かったのか、
それともフミアキの体力が貧弱だったのか、
一日目は起き上がる事すら出来なかったのだ。

「あれはアイリさんに、上手く嵌められたかな
いや、試された…そんな感じか」

ある人物の真意を忖度するに、怒らせるか
死に際まで追い込む、本音を零さずには居られない状況を作る。
主人にとってフミアキと言う人間は、信用するに足る人物か否か。
フミアキにとって、前回の遣り取りは試され様な印象を受けた。

「にしては…、些か乱暴だった様な、
時間を掛けるゆとりがなかった？性急に確かめたかった？
案外、大雑把な性格だった？クー以外はどうでも？
あ、これが一番しっくりき……」

「随分な仰り様ですね」

「ヒィッ！」

何時もの如く、いつの間にかアイリが紅茶を煎れている。
もちろん無音で。フミアキの心臓は、事、アイリに関して最弱である、
トラウマに昇華されたのかもしれない。

「サイレント・ティーは止めてくださいよ…」

「変な固有名詞を付けないで下さい、それとノックは致しました」

今日も無表情が固定のアイリに、腰が引ける、ベットの上だが。
ありがたく、と紅茶を貰うフミアキにアイリが続ける。

「楽しそうな話しでしたの、声を掛けそびれました」

まずい、と言う顔をしフミアキは露骨な話題転換を図る。

「そう言えば、茶樹の中には態と葉に付く害虫を駆除せず、
放置する育成方法があるらしいんですよ」

「……」

「…これはですね、害虫に葉を噛まれた茶樹が
再生の為に変色するんですよ」

「……」

「……実はこれ、変色ではなくて発酵してるんですよ、
茶樹が本来持つ香りは、害虫と茶樹が持つ再生能力で、
特有の匂いに変化、する、それを収穫、製茶する、そうですよ」

「……」

「……ははは、でも、茶樹自身は、
治そうとしたら、今度は、摘まれて
踏んだり、蹴ったり、じゃないですか？」

「そうですか」

もう無理だ…、と、顔で喋って口は無言のフミアキ。
三日前の出来事が鮮明に脳裏を過ぎる、
もう、遺書くらい作って置いた方がいいのかもしれない。

「そうですか、では……――」

バターン！と扉の開けられた音にてアイリの言葉が遮られる。
「フミアキさん！倒れたってどう言う事ですかぁーーーー！！」
「原稿の締切がもうすぐ…、って、フミアキさんが居ない！？」
「そんな、椅子から生えてる新種の自生植物だったんじゃ？！」
「あ！足でも生えて移動出来る様になったとか、新種恐るべし」
「そんな事より、原稿ーーーー！！どうしよどうしよどうしよ」
と、書斎の方から聞こえてきた。

「……」

「……」

「…アイリさん、連れてきて貰っていいですか」

分かりましたと、小さく綺麗なお辞儀をして書斎に向かうアイリに、
フミアキは小さく安堵した。

「もー、そう言う事は早く言ってくださいよー」

そうぷりぷりしながら話すと、女性はハニーブロンドの肩口で切り揃えた髪を

揺らしながら、フミアキに抗議してきた。

「ラミアさん、そんな事言いましてもね、こちらも立て込んでたからしょうがないでしょうに」

「だーかーらー、なんで少し間空けたら、家は綺麗になってるわ、メイドはいるわ、原稿は出来てないわ、一番なのは椅子から移動してる事、驚かせすぎですよー！」

「貴女もう１９でしょう、もうちょっと落ち着いたらどうなんですかそれと、一番驚いたのがソレってドウなんですかね」

「十分落ち着いてますー、弟から「姉さんは発育だけはいいよな」って言われるんですからー」

「ソレ、嫌味じゃ…」

「えっ？大人って事でしょー？」

アイリやフミアキよりも、高い位置にある頭を少し傾げてラミアが答えた。
女性にしては珍しい高身長を持つ彼女の、一番のコンプレックスの話に発展する前に

フミアキが話題を変える、その身長から繰り出される攻撃に、今は耐えられないと踏んだからである。

「取り敢えず、こんな状態なので原稿はもうちょっと待って下さい」

「後４日は待ちますから、大丈夫ですよー」

「４日って…、全然締切延びてないじゃないですか」

「だって、ここの所反響は良くなって売上げ伸びたんです。所長から「そろそろ気が緩むからな、絶対アイツの原稿を持ってコイ」って指ポキポキ鳴らしながら言われたらー…」

居るはずのない所長の姿が見えるのか、首をぶんぶん振って青醒めるラミアに少し同情するも、命がかかるのはフミアキも同じである。

「私の命も、もって４日ですか。なかなか悪くない人生でしたね」

ベットから遠くを見つめながら、刻一刻と薄くなるフミアキを必死に押し留める、原稿が書けなければ制裁を受けるのはフミアキだが、もちろん原稿

を持ってこれなければ
ラミアも説教を受けるのは確実である、わりかしマジに気絶するらしい。

「フミアキさん?!逝かないでー!!原稿、せめて原稿書いてから逝ってーーーー!!」

――ちょ、首が首が絞まっ。焦ったラミアに襲われ、無自覚なままに絞め落とされた。
きっかり10分後に目覚めたフミアキが、「実はほぼ原稿は出来てるんですよ」。と明かすと
「どーして意地悪するんですかー!!」と、拳が飛んできて意識も一緒に飛んでしまった。

「やれやれ、酷い目にあった」

少し開け放った窓から夜の風が吹いてくる、初夏も過ぎたがまだ夏の暑さは感じない。
昼の出来事にボヤきつつ、手元には原稿を置いて推敲する。

「これで三冊目、本当にここまで出せるとはなぁ…」

感慨深げに息が漏れる。何時もの困った様な溜息ではなく
しみじみと噛み締めた口から。

「こちらに来てからもう三年か、思えば遠くに来たもんだ…」

部屋は暗く、手元を照らすだけの小さなランプの火が、ジジッ…
と燃える。

「私はね、今の生活にとても満足してるんですよ。
ですから、そんな怖い顔しないでください」

口調を変え、部屋の隅のくらがかりに向けて言い放つ。
フミアキにしては、割と真面目な声を出す。

「…」

すぅーっとアイリの姿が薄暗闇に浮かび上がる。

「びっくりしました？いや、何時も驚かされてばっかりですからね
でも、表情変わりませんね。疲れませんか？」

冗談めかして喋るフミアキに向かって、アイリの威圧が増す。

「おぅ、そんなに睨まないでくださいよ。ちょっと場を和ましたかっただけなんですけどね」

自分で空気を作って、自ら壊しては世話のない話だが
もう一度、真面目な顔を作りアイリに向かい合う。

「何を言ったら貴女は納得してくれるんでしょうね。
先程も言いましたが、私は現状に何ら不満はありません。
ですから、これ以上望むモノは無いんですよ」

「貴方様が宜しくても、『教導院』はそう思わないでしょう。違いますか」

『教導院』それはこの国に住んでるなら無縁では居れない。
太陽神ソールを唯一神と崇め、国のみならず世界宗教と言っていい規模を持つ。

「『教導院』ですか、あの時は本気で死を覚悟しましたね」

まるで良き過去を懐かしむ様に話すフミアキに、アイリの眉が僅

かに動く。

「私が『氷』を撃った時も、貴方様は死を覚悟する様な言葉を口にしました。
アレは分かっていて巫山戯たのですか」

「死ぬかもしれないと思ったのは正真です。
真面目な遺言ですよ」

「貴方様は異常です」

ケロッと答えるフミアキに、短く言い切る。
あの時、手加減して殺さぬようにアイリが放った、形としての死に対して
淡々と遺言を述べるフミアキのその姿は、理解出来ぬモノであった。
ましてや、どれもこれも死を前にして言うには客観過ぎる。

「いやはや、手厳しいですね」

「我が主に、少しでも悪害になると判断した時
今の様に、覚悟を決めておかれるといいでしょう」

――御心が鈍らぬ様に。と、言いつつ退室していった。

「誰も彼も、死を忌避し過ぎている。
そんなに怖いモノじゃないのにな」

零すフミアキの言葉は、今度こそ誰にも受け取られる事なく
薄暗がりに消えていった。

3話　昼で夜（後書き）

お気に入りが、3件も入ってテン↓ション→上がって←来ました。
有難う御座います。有難う御座います。

4話　本でアイス（前書き）

クー、暴走のまっき。

4話　本でアイス

カリカリと筆を走らせる音が、書斎にあるだけの時間。
外では太陽が暑さを主張している。どうやら盛りの本番がやってきたようだ。
フミアキは気付かない程集中して、執筆作業に没頭している。

「うーん、やっぱりもうちょっと質のいい紙使いたいな」

独りぼやくも、普段フミアキが使っている紙は、等質の一番下の紙であるから仕方がない。
混ざり物の少ない上質な紙はお高いのだ。

「中世ヨーロッパ風って思っても、中世風ってだけで文化レベルがまちまちで
現代に匹敵する技術もあれば、さっぱり発展する気配のない技術もあるし
やっぱり不思議技術の方陣があるからなのか」

「印刷技術が方陣で賄われてるのは、本当に驚いたしそりゃ科学が発展しないわ」

「科学が根底に発展した世界と、方陣が根底に発展した世界。
明らかに後者の方が取れる手段が多い分、世界としてポテンシャル

は高い訳だが、
如何せん、両雄並び立たないのかね。かたっぽしか成長していない」

「それともあっちの世界でも、もしかしたら魔法みたいな不思議パワーが
過去存在したのかも？けれど淘汰されて科学が残った？『世界』は常に一を望む？
唯一神信仰もその表れ？」

「船頭多くして船山登っても、山に登れる技術力を持つ船頭が居いれば
いくら船頭が居てもいい気がするけど。いっそ、海を進む技術力を持つ船頭と
山を登れる技術力を持つ船頭が、タッグを組んで弟子教育に励めば、
宇宙に登れる船頭が出来上がるかもしれないな。む、両雄並び立たないか…
結局元に戻った。和を似て貴しと為し、忤ふる事を無きを宗と為せ。
実に含蓄深い言葉だな」

妄想炸裂して苦笑している様は、本当に余人を遠ざける。
この時ばかりは、アイリも危険を察してか近寄らなかったとか。

だがしかし、ここに、空気も、妄想も、書斎の扉さえもブッチ切り、
クーエンフュルダが力の限り飛び込んできた。

「先生ェェェェェェェ！！　新　刊　買ったよオォォォォォォォォッ！！！」

頬は紅潮しており、背中まで垂らした癖っけのある金髪は飛び跳ね、

エバーグリーンの瞳は感情の高ぶりを抑えきれずに潤んでいる。

「『不機嫌な勇者』第3巻読んだよッ！すごいね！面白いね！楽しかったよッ！」

高く掲げた手には、フミアキの著書『不機嫌な勇者』第3巻（最新刊）が高々と掲げられ、

「王都を出発してから、最初の街でいきなり領主を吊るし上げなんて！

その理由だっても、街中で偶然出会った孤児院の女の子が、お腹を空かした勇者に

自分のパンを上げちゃってさ！女の子も空腹だったのに

勇者のあまりの飢餓っぷりにほっとけなくなったとか、優しい女の子だし！

でも、その女の子の住む孤児院が、悪徳領主に狙われてて危ない！」

余りに嬉しいのか本の内容を興奮しながら語りはじめ、

「そこは勇者だよね！悪徳領主の乱暴な部下をコテンパにした後に！
「嬢ちゃん、パンあんがとよ。おかげで力が湧いてくるぜ。まぁ、
あいつらの事は
この兄ちゃんに任せときな」って颯爽と去る勇者！！
もう次の行動は決まってるよね！1巻の時に王様に楯突いたくらい
捻くれてるのに
女の子の純粋な気持ちに弱いなんてさ！ずるいよー！」

フミアキは、突然の事態に呆然とし、

「そのまま悪徳領主を懲らしめるかと思ったらさ、なんでか歓談し
始めるし！
もー！悪徳領主に対して、なんでそんなに下手に出るのって思った
よ！
普段は肩書きとか嫌うくせに、悪徳領主には勇者だって名乗って取
り入ろうとして
悪巧みに乗っかり始めた時は、不安になっちゃったけどさ！
まさかそれが勇者の作戦だったなんてー！そんなの普通思わないじ
ゃない！」

尚もまくしたてるクーエ、

「勇者の策略に嵌った時は、拍手大喝采！泣きながら悪徳領主が
「た、頼む！金ならいくらでも払う、だからっ！」って往生際、本

当に悪いよねー！
それに「わりーな、お前の払う金よりも、もっと価値のあるモノ貰っちまったからよ」って！
全然悪いなんて思ってないだろうにね！その後が！
「そ、それは一体！？」って縋る悪徳領主にキッパリ言い放つんだよね！
「堅いパンのひと切れさ」って！！かっこいいーーーー！！！」

何時まで続くんだこ、

「悪徳領主を吊るし上げたら、次が怒涛の展開を予想させる流れになるし！
等々、魔王軍の四天王の二人目が勇者の目の前に現れて、あれって…」

延々と続きそうなクーエンフュルダの感想文に、フミアキが机の上の手頃な本を取る。
幸い、こう言う状態の対処法は前回経験済みなので、その手順を思い出し
掴んだ本を投擲する！

「きゃんッ！」

可愛らしい悲鳴と共に崩れ落ちるクーエンフュルダ。
フミアキが放った本はアーチを描ききる前に、クーエンフュルダの

額に当たった。

何食わぬ顔で近づき介抱すると「うぅ…いたたた…」と意識を覚ます。
おデコが赤いのはチャームポイントとして数えられるだろう。

「大丈夫ですか？床にあった本にけつまづいて頭を打つなんて、そそっかしいですね」

「あ、え？。うー、あいたた、あれ…、そうなんだ…？」

きっぱりスッパリ言い切るフミアキに、若干混乱気味に呟くもまだ意識がハッキリしない、そんな彼を押し切る事にしたようだ。

「頭を打ったんですから、少し座って紅茶でも…。ん、紅茶？！」

拙い！と、冷や汗が流れるも気持ちを切り替える。だが、顔を上げるとそこには…。

「我が主に危害を加えるとは、よろしいのですね」

なにがどうなってよろしくされるのか分からないが、フミアキは

腹を括る他なかった。

「生きてるって素晴らしい」

「今回は時間がかかって、もうダメかと思ったよ…」

なんとか一命を取り留めて復活したフミアキに、心配そうに寄り添う。

「アイリさんの力加減は絶妙ですね。こう、一歩手前どころか半歩手前まで持ってかれますからね」

「褒めちゃダメでしょ、まったく先生は…。何かの拍子に、コロっと逝っちゃいそうで本当に怖いんだからね」

げに恐ろしきはアイリの匙加減である。

「まぁ、遺書は用意してあるので、問題はないんですけどね」

「この前言ってたのは本気だったの！？いや、問題あり過ぎでしょう！！」

「因みに、遺書には結構恥ずかしい事書いてあったりしますから、覗き見ちゃ駄目ですよ？」

「そんな事告白されても見ないから！そもそも先生は自分を労わんないのが
いけないよ！ほっとけば本に埋もれてるし、食事を忘れて仕事するしあっさり命手放そうとするから！」

普段から貯めていた文句がフミアキに襲い掛かる。
心配しての事だけに、この手の話をクーエンフュルダに出されると弱ってしまう。
それでも、隠す様にこの遣り取りを誤魔化す。

「聞いてる！？そもそも普段の生活からしっかりしないといい仕事も出来ないんだからね！
この前アイリの報告を聞いて吃驚したよ！
確かに早く次回作を出して欲しいって思うけど、身体を壊しちゃ意味ないんだからね！

ちょっと先生、解ってるの？！」

「聞いてますよ。でもこうも暑いと集中力が続きませんね。
腰を据えて話しを聞きますから、ここらで休憩にしましょう。
アイリさんの『氷』で、面白い事を思い出して試したモノがあるんですよ」

「むー…、話しの続きは必ず聞いて貰うよ」

――それで面白いって？基本的に素直な少年は、フミアキの提案に不満げながら首を縦に振る。

「あぁ、それは地下室に行ってのお楽しみです。
アイリさん、そこの地下室の鍵を取って貰っていいですか」

壁に掛かった鍵の一群を指して、椅子から立ち上がる。
そこでふと違和感を感じる。アイリが鍵掛けを見て動かないのだ。

「…」

「…」

「あの、アイリさん？」

初日に各部屋の鍵の説明はしたはずなんだが。と傾げる。
表情にこそ出てはいないが困惑している様子に、彼女の主人が口を挟む。

「先生、鍵の位置ずらしちゃったんじゃないの？」

「定位置は変えてないですよ、番号を振ってないから混ぜると、私でも偶にごっちゃになりますからね」

「ほ、ほら！まだアイリはここの日が浅いから、こう言う所で先生が気を利かしてあげないと！」

何処か腑に落ちない面持ちを残しながら、フミアキが地下室の鍵を手に取り
二人を案内する為に先導する。

「ここって、先生があんまり入らないで。って言った所だったかな」

「えぇ、中には危ない物もありますからね」

「危ないって、一体何が入ってるの？」

「いろいろですよ、気分転換にとか手慰みで作った物をっと」

そう言って鍵を差し込み扉を開ける。地下室特有の湿った風を受けながら
扉が重々しく開かれた。

「うわッ…。これは」

「……」

先程の事があってなのか、アイリは目で刺し殺してくるだけ。
少年は口を開けたまま動きが止まった。つまりは、惨状、ただその言葉だけが
相応しい部屋だった。

「確かこっちの方に―…」

あれどこだったっかな。などとぼやきつつ部屋を漁る。
物がなければ、人が３０人は入れそうな大きな部屋であろう場所。
だがしかし、所狭しと置かれた謎の物体に占拠されてしまっている。
ここを見た後だったら、書斎の本の山が可愛く見える。そう思わせ

る程である。

「……ねぇ、先生。聞いていい？」

本来ならアイリが詰問したいくらいだが、未だに沈黙を保っているので
クーエンフュルダが代わりに問いかける。

「おっかしいな、どうしました、クー？」

「コレナニ？」

「ですから、私の作品達ですね。気晴らしに創作したり、分解したり。
あ、そうでしたそうでした。昨日完成したから、冷凍室に入れてたんでした」

――いやー、歳はとりたくはないものですね。からからと笑うフミアキに
クーエンフュルダは大きく息を吸い、大咆哮の構えに入った。

「――――ッ！？けっふけっふっけ…ヶほッ！」

「クーエンフュルダ様！？」

いきなりむせた主をアイリが心配する。先ほどまでフミアキが探し物をしていた為、
部屋には埃が舞っていた。その中で深呼吸すれば、自然な帰結だろう。

「何やってるんですか、こんな所で深呼吸して。
目的の物は上にありますから、さっさと出ましょう。とっとと出ましょう」

危険を察知して、むせる彼を押し出して部屋を出る。
ここは、男フミアキ最後の砦。一ヶ所くらい雑多な部屋があってもいいじゃないか
と、思いながら地下室を後にする。

「けほッ、酷い目にあったよ…はぁ」

アイリから水を貰い溜息を付く。そんな少年を尻目に、フミアキは一抱えもある樽を
持ち出してきた。樽からは冷気が漏れてる事から、冷たいナニかが入っていると推測出来る。

「先生、一体ソレ何なの？シャルルとか？」

クーエンフュルダの言うシャルルとは、この国の夏場に愛食される果物の氷菓の事である。手軽に涼を楽しめる為、
この国の住人なら誰しもが口にした事がある定番品でもある。

「ふっふっふ、そんな単純な物ではありません！私が試作を重ね苦労を積み、そして完成に漕ぎ着けた、血と涙と汗の結晶です！」

何時になくテンションの上がったフミアキの返答から、
恐らく食べ物関係だろうと思わせるが、彼は「あの部屋で作られたの…？」
「仰り様は大層ですが、血と涙と汗…口にして大丈夫でしょうか」
と、アイリ。
二人して引いていた。

「まぁまぁ、怪しい物は入ってないんですがね…。ほら、こう言う食べ物ですよ」

厨房のテーブルの上に取り出された小皿に、樽の中の筒から取り出した白い塊を盛る。
未だに警戒の色を隠さない二人に説明をする。外に出したからには早めに食べないと勿体ない。

「これはですね、牛乳と生クリームと卵と砂糖を混ぜて冷やした食べ物…
その名を『アイスクリーム』です！」

「うわー、薬膳料理だったんだね。でも、牛乳ー…」

「クーエンフュルダ様、牛乳は身体に良い薬効があると聞き及びます。
やはり偶の少量くらいは、御飲なさった方がよろしいかと」

「何故に薬膳。いいですか、これは冷たくてあまーい至高の嗜好品と言っていいでしょう！」

「うーん、先にアイリ食べていいよ？」

「エェイ！つべこべ、言う、なし、食べ！味わい！虜なる！」

いい加減溶けそうになってるアイスクリームを掬って
クーエンフュルダの口の中に押し込む。何故かカタコトで。

「むぐッ！ふっく……む、ぐむぐ……！？」

「ご無事ですか！？クーエンフュルダ様っ、おのれ
やはり貴様は危険だ、ここで処分す」

「……美味しい！！」

「クーエンフュルダ様？」

「ふっふっふ、そうでしょうそうでしょうアイリさんも食べてみて
ください」

「アイリ、これすっごい美味しいよ！こんなに美味しい物食べた事
ない！
うわー！あまーい！冷たーーい！あまーーーい！」

「……そう言われるのでしたら」

目をきらきらさせて感動している彼に、警戒心を鎮めてスプーンを取り掬う。
クーエンフュルダはパクパク食べてる。必死に食べてる姿は小動物の如きで、頬を緩ませる。
が、その隣で得意げな顔をしてるフミアキが、鬱陶しい事この上ない。

「これは…、不思議な食感ですね。口溶けが滑らかでシャルルの様な水っぽさがない分、
より甘さを堪能出来き味わい深い…。生薬がこれ程とは、確かにこれは美味です」

「思わないよね！苦くて臭くて美味しくない牛乳が、こんなに美味しくなるなんてさ！」

「氷を分けて欲しいと言われた時は、如何なる意図か計りかねましたが、
感心致しました。」

「アイスクリームもそうでしたが、本のアイデアも頂きましたし、
こちらが感謝しなければいけませんね」

「あいであ？本の事とは一体」

「あー、アレやっぱりアイリだったんだね。羨ましかったな」

アイスクリームをパクつきながら喋る。横でピシリと固まる音が、露骨に拙いと顔を顰めるフミアキを、じろりと観察して少年に向き直る。

「クーエンフュルダ様、どう言った事でしょうか。お聞かせ願いたいです」

「アイリ、先生の本読んでない？魔王軍『四天王』の二人目が出てきたんだけど
それがアイリにそっくりなの！灰青色の髪に氷の瞳、本だと
すごい……、刺激的な衣装をって書いてあったよ。…男の人悩殺とか」

首をぶんぶん振って厨房の隅に逃げるも、アイリの歩みは緩慢だった。
俊敏に動かれるより、鈍い動作で近づかれる方がよっぽど怖いのだけれども。

「落ち着いて。確かに、無断でキャラのモチーフにしたのは謝りますが、
そう、このアイスクリームに免じてどうか、許して貰えませんか」

問いかけるフミアキに、アイリの肩で切り揃えられたグラッシュブルーを揺らし
アイスブルーの瞳が色濃く染まる。つまり、許す気はさらさらないと体言している。

「命を安売りするのは如何なモノかと思いますが、本願でしたら致し方ありません」

「別に死にたい訳では…、痛いのは嫌いですよ？スタイルがいいのは褒め言葉と思うんですが」

「では、眠る様に逝きなさい」

アイリの踊る指が方陣を描き、空陣から淡い光が漏れる。
フミアキは視線をクーエンフュルダに移すも、少年はアイスクリームを食べるのに忙しい様だ。
どうしてこうなった。そう思いながら目を閉じるのであった。

4話　本でアイス（後書き）

読んで頂き有難う御座います。
まだ初心者で、客観的に自分の文を読めなかったりします。

漢字のルビがあったら。や、場面の説明文が足りない。
や、文法の間違い等
気になる場所がありましたら、ご意見、ご指摘助かります。
よかったらお願いします。

5話　旅で留守

「あー…、はぁ」

その日は、珍しくクーエンフュルダがアンニュイな様子になっていた。
いつも間隔を空けて遊びに来る彼は、感情表現が豊かで小動物的に愛くるしいのだが、
今日に限っては哀愁を体現するかの様な姿が、その容姿端麗さから見る者を危うげにする耽美さがあった。

「全く、さっきから何ですか。溜息を付くのは私の専売ですよ、君は元気いっぱいが売りじゃないですか」

「売りってなんなのさ！？
もー、溜息が売れるなら品切れになるまで買って欲しいよ」

「君の溜息が切れたら、今度は私の溜息を横流ししますね」

「先生のがきた？！そんなの押し付けないでよ！！」

「出資者の貴方と受領する私、二人は常に一心同体だったんです」

「何時の間に!? 一つだったら僕の比重高いのはおかしいよね!」

「ははは、一心同体と言ったでしょう
ですから、クーの溜息を私に押し付けて下さい。
何、溜息は私の専売ですから楽勝ですよ?」

「あぅ…、先生が恥ずかしい事言ってる」

「女性に言うなら口説き文句ですが、
君相手に何言ってるんですか、思春期特有の悩みなら
同性の方が打ち明け易いでしょう。相談に乗りますよ」

「そんな深刻な悩みでもないし、思春期って…」

――実は。と、何故か顔を赤らめて説明を始めた。
どうやらそっちの話題よりも、溜息の理由を喋った方が楽だった様
である。

「へぇ、君の誕生会ですか」

「そうなんだ、毎年開いてくれるお父様には
申し訳ないんだけど、いろいろあって苦手って言うか気が重いんだ

よね」

「まぁ、分かる気もしますよ
年が経つに連れて、そう言った催し物は気恥しいですからね」

「お父様が盛大にしちゃうもんだから、余計に恥ずかしいよ」

「何、家族に愛されてる証拠じゃないですか
いい親御さんを持ちましたね」

「…先生、にやにやしながら言ったって説得力ないよ！！」

二人の遣り取りは平常運転に戻った様である。
もちろん、この後参上したアイリにお仕置きされたのは言うまでもない。

「これでよっしと」

寝室にて荷造りをするフミアキ、その服装は旅装を思わせる。
いつくもの持ち物を点検し、滅多に履かないブーツの踵を少し蹴る。

「どちらにお出掛けでしょうか」

「オオゥ！？何度体験しても慣れない慣れにくい」

「慣れて下さい」

「自分が譲歩するつもりが微塵もない…とは…
まぁいいです。私は暫く旅に出ます、家の事はよろしくお願いします。
後、ラミアさんが来ら追い返してあげて下さい」

最後のセリフはいい笑顔で決めて、何故か窓から出て行くフミアキに
何時もと変わらず表情を変えないアイリは、ただ窓に向かって小さくお辞儀するのだった。

「えぇーー！先生居ないの？！」

何時もの様に遊びに来たクーエンフュルダが驚きを露にする。
それもそうだ、彼が引っ張り出さなければ食料の買出しすらもせず
に仕事をする。
訪ねてきて留守だった記憶が、彼にはなかった。

「連絡は出したのですが、何処かで行き違ったようですね。申し訳
ありません」

「ううん、アイリが悪い訳じゃないし。
でも珍しいね、何処に行ったか知ってる？」

「行き先は仰らなかったので、コリーを出しています。
もう少ししたら連絡が来るかと思われます」

「アイリにも言ってかなかったんだ、むぅ
なんだろ、すっごい気になる！あ、旅行記なんか出す為の取材かな…
でも、そんな事言ってなかったしな」

一人唸って考え出す。フミアキに対する情報のカードが少ない事に、改めて思い知らされる。

「そっか…、僕、先生の事何にも知らないんだ」

クーエンフュルダがフミアキを知ったのは、『不良勇者1巻』からであった。
偶々メイドの一人が置き忘れていった本を手に取り、何気なく捲ってから
大きな驚きと感動を覚えた。物語の書き方、登場人物の斬新さにも目を見張ったものである。

それまで本と言うモノは、王国史か、帝王学だったり、ソール信仰書など
所謂、お堅い本であり、それより易しい本となると、童子向けの御伽噺まで来てしまう。
大衆向けの娯楽書物は、ゴシップ等低俗なモノで占領されていた。
（年齢制限がかかる物が大半を占めているのだが、クーエンフュルダは存在すら知らない）

ましてや、フミアキが題材としたのは、『教導院』が検閲に最も力を入れる
『勇者』を扱う読み物であった。『勇者』と言う名は、『教導院』の看板にも等しく

イメージを崩す様な本は直ぐ様焚書された。

「……っぷ、くくくッ」

「如何なさいましたか」

「うん、先生を知った時の事を思い出してたんだけど、『教導院』に真っ向から喧嘩売る様な本を出した人は、どんな人だろうって思ってたなー」

「あの本の様な勇者像を『教導院』が認めるハズも御座いません。自殺志願者でなければ、頭の緩い人間だろうと噂はありました」

「勇者ボルドーはカッコイイと思うのにな。人間味に溢れててさ、ふてぶてしくて、信念を絶対曲げない！『俺の剣戟がぶれないのは、ぶっ太い信念が通ってるからよ！』ってね！痺れるーーー！もー、そうだよ！全然『教導院』の言う『勇者』像を壊すモノでもなんでもないのにな」

「人間味、と言うのが問題ではないでしょうか。『教導院』は『勇者』を

神聖性を持って祭り上げておりましたから。畢竟する所、拘束されたのも当然でしょう」

「今思い出しても腹立たしいね。頭堅すぎだよ、先生の書く新たな『勇者』像だったら
あんな凝り固まった『教導院』の布教する、『勇者伝説』よりも信者増えるよ！
それなのに、『教導院』ったら先生を処刑するとか言い出してたし」

「あの時は、助け出すのがもう少し遅ければ執行されていたでしょう。……残念です」

「アイリーン？」

「も、……申し訳ありません」

「全く、アイリは先生に厳しいんだから！でも、初めて牢獄に入った時
先生、遺書みたいなの認めてたよね」

「辞世の句などと仰っていました。何処の国の文字か分かりませんでしたが」

「諦めが良過ぎるのも、その頃から変わってないよね。
その点だけは、改めて欲しいのにちっとも聞いてくれないし」

「アレは病気の類です。心配するだけ、周りを巻き込み傷付けましょう。
私としましては、深入りして頂きたく無く…」

「そう…だね。でも僕は……いや、私はアレが放って置けない。
折れない信念を持ち、何者にも引かぬ『勇者ボルドー』の様なアノ男が。
あの後の出来事でもそうだが、お前には苦労辛苦を掛けるな」

「勿体無きお言葉に染み至ります。全ては我が身の錆、どうかお心を痛めませぬよう」

「その後の経過は…、あまり芳しくない様だな。私こそ未熟の身を思い知らされた。
確かに、方陣に頼り過ぎると言われても返し様がない」

「いえ、日常生活には何ら支障は御座いません。御側を離れる事になりましたが、
私は常に御身の剣で在りましょう」

「ふふッ、この姿見では『連環の契』になってしまうぞ？

アイリーンは大胆だな、くっくっく」

「御戯れを…」

途中から引き締まった空気を吹き飛ばすように、クーエンフュルダは背伸びして
長椅子から飛び上がる。

「よーし、この話しはここで終わりっと！アイリ、折角先生が留守なんだから
懲らしめる様な発見を見つけに、地下室の謎の魔窟を探検しに行こう！
先生が泣いて、もう死ぬのは諦めますから許して下さい。って言うくらいのをさ！」

「良い案で御座ます。お供仕ります、我が主」

5話　旅で留守（後書き）

思い出したかの様に登場人物の身長の並び。
ラミア＞フミアキ＞アイリ＞クー　と、こんな感じです。

説明が足りない足らない至らない。
それでも読んで頂き有難う御座います。

6話　旅で遭遇（前書き）

……等々「表現の幅が狭いより広い方が良い」と付け加えたＲ１５の実行される話を書いてしまいました。この話を上げるのに相当悩みましたがｕｐする事に。賛否両論あると思います。現代では法に抵触する行為ですので、不快に思うかもしれません。それでも見ていただけるなら幸いです。

6話　旅で遭遇

ジリジリと太陽が照りつける。『教導院』に楯突き太陽信仰を一度敵に回した男には容赦なく、その力の限りの熱射が注がれていた。
慈悲は無く、夏と言う名の暴君が頭上に鎮座するこの世界。
目深に被ったフードは、まるでソール神から隠れ逃れる様にも見え口は真一文字に閉じられ、良く見れば歯を食いしばっていた。

男は突然駆け出し、街道の側の林に駆け込む。
３０過ぎの草臥れた男の顔には、焦燥がありありと浮かんでおり唐突な行動に不審が見え隠れする。

辺りを見回し警戒の色を強めたその顔色に汗がびっしりと浮かぶ、気温に寄る発汗作用だけでは有り得ない量である。
林の木々が、男の緊張に引っ張られる様にさざめく。

暫しの沈黙、そして何かを確認するかの様に時を計る。
遂に、男は手を動かし行動を開始する。

「……はぁーーーー。生き返るーー…、…うぅ、ぶるぶるとっとっと。歳かねぇ、切れが悪いわ」

ドゴォォォォッ！と、何処かで何かが地面に突っ込む音が聞こえた。
が、大開放中の為に気づかない。

「ふぃー。やっぱり最初に水分補給し過ぎたか、……ぶわっくっしょい！
んー、何時もならそろそろ家に来る頃合だな。クーが噂でもしてそうだ」

かちゃかちゃとベルトを引き上げ鼻を啜る。フミアキは木々に若干の栄養素を
振り撒いて、晴れ晴れした表情を浮かべる。水筒を取り出し、旅に

置いては貴重な水で
手を洗うと、腰に付けた布で手を拭き汗を拭った。

「いやー、青空の下でのこの開放感。これぞ旅の醍醐味だ」

――うんうん。と、一人で納得する。また何処かで、ゴスゥゥ！と
何かが木にぶつかる音が聞こえる。

「はて、何やら音が…。まっ、気のせいか。木の中だけに…」

ドヤ顔でお世話になった木に呟く。もしこの木に腕の一本でもあ
ったのなら
気絶するまでぶん殴られる事間違いないだろう。
ガスガスガス！と、木を連打する音がまたまた聞こえるも、荷物を
背負い直して
街道に戻る。

「あー、久々の一人の時間はいい。アイリさんが来てから
快適に過ごせる様にはなったけど、元々独り身が長かったからな」

歩く。

「やっぱり部屋に籠ってるセイか身体が鈍ってる。王都から三日目。

明日辺りには、筋肉痛が来てくれるといいけど…こなかったら怖いな」

ブーツを鳴らし歩く。

「そろそろ、クキの実の木が見えるか。アレって梅みたいに酸っぱいから
疲労回復の効果が期待出来そうなんだよな。街道に生えてるのは自由に取っていいらしいけど、
そこはモラルに気を付けんと、お天道様が見てるってね。
そう言やあっちの昔でも、街道を利用する旅人の為に果樹を植えたって聞くし。
確か、戦時中は果樹を切り倒して、進行の邪魔をしたとかもあったような」

歩く。

「昔の人の効率に対する思いには執念を感じるね。一の事柄に二も三も含ませる、
こう言うのを『一を似て十全と為す』だったか。いや、そもそも現代社会の専門性が
細分化し過ぎているな、過去の効率とは方向が違う。言うならば『百細を似て一と為す』か」

汗を拭い歩く。

「そうだな、例えば料理に使う出汁つゆ。煮物専用とか、鍋つゆ専用とか、
まぁ色々ある。こう言うのを買い慣れてしまうと、みりんと醤油と砂糖、
これらで元を作ると言う発想が薄くなってしまう。一本で簡単に作れて便利なんだけれど
要は、応用が効かなくなるんだよな。酷い例だと、冷食でお弁当専用焼鮭なんてのもあったな。
鮭の切り身買って、お弁当枠で切ればいいって話しなんだけど、時間短縮にはなるんだろうけど
…主婦の朝は戦争だって言うし、うん、全国のお母さんは偉大です。
感謝してお弁当は食べよう」

何かに向かって言い訳しつつ歩く。

「おっと、三叉路に着いたって事は…、ふむ、ここから真っ直ぐ北だったな
それでは、そろそろショートカットするかね。……誰も居ないよな」

足を止める。

「あー、本日は晴天也、本日は晴天也。……ん、んっ、んぁあー、
此方より、彼方へ、続くぞ連なれ重なり往く、阿、吽、走者の蝉の聲
外天、正天、運龍昇らば快天の、魂に聞こえし奥山彦」

ブーツの踵を鳴らすと地面に方陣が現れる。地陣より微量の光が立つ。

「――――『韋駄天ブーツ』発動」

一歩力強く踏み出すと、瞬間に身体が加速する。頭を低くして抵抗力を抑える。
もう周りの景色は凄まじい速さで過ぎ去って行く。

「こ…の、加速、には、やはり、慣れ、ない。誰だ、こん、なの、作った、のは」

歯を食いしばり足を動かし空気を切る。言う為れば、急な下り坂を走り抜く感覚。
後半は意味もない愚痴である。

「はぁ…、帰った、ら、改良、せねば」

『光具』と言われる物がある、方陣の効果を限定的ながらも物の中に篭める技法。
方陣の短所は、その発動までに掛かる手順の煩雑さが一番に挙げられる。

仮に戦闘中などは、一々陣を書き、紋言を唱えてる暇はない。故に、予め出来上がった
方陣を物に篭めた光具は『形ある紋言』のみを持って発動されるので、年若い者に好まれる。

大した力も持たないフミアキに取って、補助具である『光具』は、実にお誂え向きだった。
作成するにしても、篭める際に力の強弱は関係なく、如何に正確に方陣図を刻めるか、
如何に丁寧にのべつ幕なしに力を篭められるか、如何に方陣図を多く盛り込めるか、
如何に自身の想いを乗せられるか、が効果に強く影響を及ぼす。そうフミアキは思っている。

このブーツ、『韋駄天ブーツ』はフミアキの自作の光具で、旅の共には必ず履いて行く。
効果は、歩いた歩数を靴に貯める事で、発動後爆発的な速さを得る物である。
体力が貧弱で足の遅いフミアキにとって、『韋駄天ブーツ』を使って漸くこの世界の一般人の旅程
と並べる。一般人は一般人でも女性の方で、と言う事実にフミアキの心は深く抉られたそうな。

目紛るしい景色の変化は、やがて木々の緑を映すだけになっていた。
目的地が近づいてる事に、安堵の溜息を付きそうになるも、その口は加速に抵抗する様に固く閉じられている。早く目的地に到着して身体を休ませたい、と安堵に緩む意識を立て直す。
この高速走行中は、挙動がその速度に寄って著しい制限を受ける。
そう、

「ん?な、黒い……」

車は、

「え?!ちょ、とま……」

急には、

「うおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉ……」

止まれない、のだ。

ゴッチン、と言う音と共にフミアキは意識を飛ばす。そしてフミアキに突撃された
黒い塊が、ドォォォンと音と共に倒れる。三つの息遣いが暫し森に溶けるも
直ぐ様、黒い塊から唸り声が漏れる。

「グルゥゥウッ」

「……っ！？」

「……」

唸る声、息を飲む声、フミアキは今だ気絶を続ける。そして、その場面におかわりが入る。

「ふっざけんなぁぁぁぁ！！あんのぉ、う”ぁかがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

「もう許さない、もう許さない、もう許さない！あんた！邪魔よ！！」

言い終わるよりも先に女の剣が一閃すると、黒い塊が無常にも切り刻まれる。

「熊如きが！あたしの邪魔すんなっ！！いい？！あたしはひっじょーに苛立っている！
あの馬鹿が、突然馬鹿みたいな速さで走り始めて……！このあたしが追いつけない、
これ以上離されないようにするのに手一杯になるなんて！！」

燃える様なカーマインのショートを震わせ、アンティックゴールドの瞳は怒りを隠す事なく露にしている。

「……あの」

「ったっく！熊如きのセイで、あの馬鹿見失っちゃったでしょ！腹立たしい、苛立たしい
もう、この辺って四角頭の懐よね。ならいいわ。行き先は絞られる」

「あの……！」

「あん？！うっさいな！あたしは忙しいのよ！」

「ご、ごめんなさい」

カーマインの少女は、か細い声を一喝する。ん？と首を傾げ、漸くその場に居た
小さな少年に気付く。

「あんた誰？なんでそこの馬鹿は寝てんのよ？」

時刻は夜、少女は石造りの家を前に立っていた。傍らにフミアキを背負っている小さな少年がいる。フミアキを背負おうとした先に
「運ぶよ、兄ちゃんを持ってくのは俺の仕事だし！」などと言われたのだ。
どうやら、この少年とフミアキは顔見知りの様で、随分慣れた手つきで背負っている。

手が塞がっている為、少女が扉を開けようとする前に乱暴な音と共に扉が開かれる。
１５０にも満たない小柄な身体、けれど立派な髭と腹が壮年の貫禄を出している。
髭の男は、大きな斧を背中に負いその覇気を溢れさせていた。

「お、お前！？何処に行ってやがった！心配したぞ！！」

「父ちゃん、ただいま！」

覇気が霧散する。親子は二人で抱き合い、無事の再開を喜ぶ。
フミアキは投げ出され地面に転がされる。

「お前が戻らねぇって言うんで、今から出る所だったんだが…
よかった、本当によかったぞ」

「ごめんよ父ちゃん、森で熊に見つかっちゃって…でも、この人が
助けてくれたんだ！」

放って置かれた少女に父親が漸く気付く。少女を見ると何とも複
雑な表情を出し、
息子を横に置き向き直る。

「ふん…、息子が世話になったようだの。一応感謝するぞ、丸頭」

「別に？子供の世話くらい出来ないもんかしらね。
槌を振るうばっかしてんじゃないわよ、四角頭」

横から、父ちゃん！と、諌める声が聞こえたが二人は睨み合う。

「……、まぁいい。随分懐かしい顔も居る事だ、息子の礼もある。中に入れ」

質素な室内に通され、少女は勧められたテーブルの椅子に腰掛ける。
フミアキは何時の間にか長椅子に寝かされていた。

「母ちゃん、グリスが戻った！客もいるから茶ぁ出してくれ！
ほれ、お前も母ちゃんに顔見せて来い、ったく」

「うん、お姉ちゃん、またね！」

「あー、改めて礼を言うぞ。グリスを助けてくれて感謝する。儂の名はグリゴス、
巌窟族でぁ光具鍛冶を主にやっとる」

「見れば分かるけど徒人族。で、あたしはコリー。あの子を助けたのは成り行きだったけどね」

――言っても危ない所を防いだのは、そっちの男らしいけど。と、

続けその時の説明をする。

「ぐっはっはっは！フミアキらしい、全くこいつは変わらんな！」

大きな髭を揺らし破顔する。コリーは目を剥く、気難しいと言う言葉の代名詞が笑うのだ。

「……こいつ、何なの？知り合いみたいだけど」

「なんだ、嬢ちゃんはフミアキの連れ合いじゃねぇのかい」

「誰が、偶々、偶然、気紛れで助けただけなんだから」

「こいつぁな、2年程前までここに置いてやった縁がある。言ってしまやー、ただ、それだけだ…。しっかし、見ねぇ間に随分と痩せやがったな」

――飯くってんか。と、フミアキを見ながら話すグリゴスの顔は穏やかだった。

それだけで、グリゴスとフミアキの関係が透けて見えてきそうだった。

「こいつの用は大体予想がつく。だが嬢ちゃんよ、お前ぇなんだって森に居た？
見た所、仕入れの商人って風には思えねぇな」

「…」

「…」

あれ程豪気に笑っていた顔も鳴りを潜める。厳い髭の男と紅い髪の少女が睨み合う。
グリゴスが少々感心する。年若い少女が、鋭い眼光に気負いもせずに向き合ってる。
何時まで経っても埒が明かない、もう仕舞だ。と言わんかの様に、この場を流す事にした。
それにこの少女、一応息子の恩人である事を思い出したようだ。

「まぁ、いい。何の目的があるか知らんが、兎や角言うめぇよ。だがな、
家族に手を出すな、それだけは言っておくぞ、丸頭」

「……誰もそんな事しやしないわよ、この四角頭」

こうして、フミアキは気絶したまま夜が更けていった。

６話　旅で遭遇（後書き）

ご意見、ご指摘ありましたらお願いします。
漸くファンタジーっぽい種族が出てきました。
どう見てもドワーフっぽいです、本当にありがとうございました。

※１１月１９日　矛盾点を加筆修正。

7話　旅で団欒（前書き）

上中下の3話構成で考えてたのに収まりそうにない…。
ぐだぐだですが、それでも宜しければどうぞお読みください。

7話　旅で団欒

「ぐっ！……はぁ…はぁ、あ、あったま痛っ」

フミアキが目を覚ましたのは翌日、頭の中を鈍痛が走る事で意識が戻る。
ベットに寝かされている事に気付き、ゆっくりと頭を上げて部屋を見渡す。

「……やれやれ、どう言った魔法かね。なんとも懐かしい」

この場所は、2年前までフミアキが使わせて貰っていた部屋だった。

「移動中、熊？事故って…気が付いたらグリゴスさん家って。何がどうしてこうなった」

起き抜けの頭に鈍痛を抑えて、意識が途絶える前を思い返す。
記憶を掘り起こす事と、鈍痛がせめぎ合って、暫し思考停止に陥る。

「あ、兄ちゃん！起きたんだね！」

そこへ、何とも高い子供の声が元気よく張られて、フミアキが改めて悶える。

「お、おはよう…グリス君？ちょっと声抑えて貰えますかね」

「あ、ごめんね。どう起き上がれそう…？」

つい口を突いて出てしまった言葉に後悔する。子供に取って声が高い事も
大きく声が出てしまうのも当たり前の事であり、まして自分を心配しての行動で尚更である。

「すいません。少し頭が痛くて、ですね。もう大丈夫なので気にしないで下さい」

「朝ご飯だけど、どうする？部屋まで持ってこようか？」

「いえ、それには及びません。グリゴスさんにも挨拶しないといけませんから」

やんわりとグリスの提案を断り、登る痛みを表情筋に力を入れて黙らせる。

心配そうにこちらを見てくるも、子供に気を使わせない様に何時も通りを装う。

「おう、やっと起きたか、とっとと飯にするぞ」

「お久しぶりです。グリゴスさん、それに、パルさん。お二人とも変わりないようで」

「あらあら、フミアキ君は相変わらずねぇ。もう、身体の方は大丈夫なの？
何時も思うんだけど、無理しちゃ駄目よぉ。フミアキ君は何にも言わないんもんだから
おばさん心配になっちゃうのよ。どう、向こうでいい人でも見つかったかしらぁ。
仕事の方は順調みたいなんだけど、偶にはこうやって顔出してくれると嬉しいわぁ
そうそう、前もって言ってくれるとフミアキ君の好きな物用意するだけどね
突然だったもので、あんまり大した用意も出来なくてごめんねぇ
あぁ、でも身体に触るから、朝は軽くしておいた方がいいかしらぁ」

「だぁ！母ちゃんはちっとは黙っとれ！話が進まんぞ、お前も突っ立っとらんで
とっとと座れ。母ちゃんの長話が止まらんからな」

椅子を引いて食卓に着く。この家の住人に合わせて作ってある為に
フミアキにとっては若干低めであるが、昔使っていた食卓台が置か
れている事に
ほろりと感謝の念が湧いてくる。その食卓台は、よく見ると二人分
あった。

「…」

「…」

期せずして隣に座る女性と目が合う。カーマインの髪をショート
に散らして
アンティックゴールドの瞳と勝気な眉がフミアキを覗いている。そ
のまま見つめ合ってしまうも
不似合いな瞳の若い女性に留められる。歳は１０代後半だろうか、
強気な眉がピンと二本乗る
往古の黄金色の瞳は、アンバランスな印象をフミアキに与えた。
しかし、古色の瞳に若い生命に溢れた眉、新旧が渾然一体に作らた
美しい造形だったから。

「……なによ」

「あ、あぁ、いえいえ、なんでもありません。おはようございます。
初めまして、で、よろしいですかね、フミアキと申します」

「…」

「かあー！フミアキ、何時もいってんだろうが！その鯱張った言い方はやめろ！
飯が不味くなる！嬢ちゃんも嬢ちゃんだ、飯時にそんな顔してんな。
いくら息子の恩人だろうが、あんまし過ぎるとたたっき出すぞ！」

家主から、バックアタックと後方支援が同時に飛んでくる。性格が大雑把な為か
面倒は個別に対処するより、引っ括めて両断するのがグリゴスの持ち味だった。

「ふんっ、コリーよ」

「はい？」

「…だから、あたしの名前。コリーよ」

ぶっきらぼうに述べて、視線を外す。釣られてフミアキも視線を食卓に戻す。
それを合図に、グリゴス家の遅めの朝食がようやく始まった。

食事が終わり揃って緑茶を啜る。巌窟族の育てる茶葉は、
巌窟族そのものと言わしめる程渋い事で有名であり、岩窟族以外では
滅多に口にされないが、物好きが愛飲する事でも有名だったりもす
る。
因みにこの巌茶は、子供には渋すぎる為飲ませるのは禁止されてい
たりする。
禁止されると手を出すのが子供の常だが、余りに苦く渋いので子供
は誰も嫌う、
まるで薬だと顔を顰める。ので、グリスは朝食が終わればすぐ外に
出ていった。

「フミアキ、お前どう言う了見で戻ってきた」

「あんた」

「わぁーってる。お前、叶えたい夢がある。そう言って出てったな
お前は、光具造りの才がある、こりゃ、儂ら巌窟族でも届かん所に
あるやもしれん。
ここで光具造りを修得し、鍛え上げりゃぁの話だがな。

巌窟族の光具ぬちだったら、喉から手が出るくらいのモンだ
それを捨てて、お前は行ったな、叶えたい夢があるってよぉ」

「…」

「そんだけの気概を持って出て行った。ならよ、なんで高々2年で
戻って来た。
もうお前の夢は叶っちまったんか？もういいのか？」

「グリゴスさん、私の造る光具は『外法』です。今まで巌窟族の方
々が
造り積み重ねた技法に泥を塗ってしまいます。貴方達の技に尊敬す
る、
だから私は光具造りを本職にする事は出来ません。この技は埋めて
置くのが
いいんですよ。一般常識がある者なら激怒するでしょうし」

「はぁー…、変わんねぇなフミアキよぉ。高が異色の技術だ、１０
０年もすりゃ
お前の遣り方が世の常になるかもしれんぞ」

「それなら私がせずとも、時代が技術を求めましょう。
その時が来たのなら、私が心の中で先駆したとほそく笑む、それだ
けでいいです。
それに、私にはまだまだやりたい事が一杯ありますから、

『槌を取り替えるな』とは岩窟族の先達の言葉ですよね。
私は筆を握るだけで手一杯ですよ」

「あー言やこー言う、お前って奴は本当に七面倒くせぇ。
わーったから、要件を言え。態々訪ねてきたって事は、なんかあんだろ」

「いやですね、グリゴスさんの顔を見に来だけですよ？
それにパルさんの美味しいご飯とお茶を飲みに来るだけでも価値はあります！」

先程までの厳茶の様な空気が一気に薄くなる。代わりにグリゴスの顔が渋くなり
真っ赤になって沸騰し始めた。パルが「あらら、おばさんからかっちゃ、ダメよぉ」と
嬉しそうに言ってる事にも原因があるのかもしれない。

「フーーミーーーアーーーキーーー！！そこに首置け！！巫山戯やがって、
今日と言う今日は許さねぇからな！いや、今日こそ許さねぇぞ！！」

「わーわー！冗談！冗談ですって！グリゴスさん落ち着いて落ち着いて！」

黙れ！逃げるな！首を置いてけ！え？これなんて置いてけ堀の妖

怪？
などと追い掛け追い逃げの二人劇場を始めてしまった。

「……ねぇ、これ、止めなくていいの？」

「うふふ、懐かしいわね。フミアキ君が居た頃は毎日がこんなもんよぉ
最近はご無沙汰だったし、あのひとったらあんなに喜んじゃってぇ」

これに驚いているのはコリーただ一人で、二人はとても自然に逃走劇を繰り
パルは笑顔で湯呑を片付けている。慣れたモノであった。

「で、命の恩人の誕生会があるから、御山に入る許可と鍛冶場を貸してくれってか」

「誠に持って仰る通りに御座います。何卒グレゴス様の御力を持って二つの御許可を采配して頂きたく存知上げます」

ギン！と眼光が、まだ足りんのか？と問い掛けてくる。
もう既に、フミアキの身体はぼろぼろで倒れる寸前だが、グレゴスの前
正座して会話している。これでもフミアキを気絶させずにお仕置きするには
技術を要するので骨が折れるが、実に巧みな仕置き具合であろう。

「……いいだろう。だがよ、お前一人で御山に行ったらどうなるか分からねぇ
嬢ちゃん、こいつに付いてってくれんか」

「なんであたしがっ」

「フミアキは体力がねぇ。グリスと喧嘩しても負けんだろう
そんなんが御山に入っても、火見るよりあきらかだ」

「あたしが付いてく意味が分からないわよ」

「そうですよグリゴスさん。コリーさんも用事があってここに来たんでしょうし」

「なんなら護衛の報酬も付けてやる、儂が造った光具の3級
それに、『準範士』も乗っけてやるぜ」

「はっ？！『準範士』？！それって上から二つ目……！」

「これでも日々成長してますよ。昔の私と思わないで頂きたい」

「正確にや、上から三つ目だがな。いい加減『準』はとっちまいたいがよ」

「普通に言ったら、『範士』が最高位でしょ…ウソ…本当に？
光具鍛冶に疎い奴でも、『範士』が類い稀な功績を残す様な存在ってくらい
知ってるわよ……」

「魑魅魍魎の巣食う王都に2年も生き延びたのは伊達ではないのですよー」

「どうだ悪かねぇだろ。儂の見立てなら、お前さんは『速さ』中でも『剣速』で
押す戦法を使うと見た。だが、そう言う奴等は得てして防御が軽くなる。
そりゃそうだ、重いモン身に付けてりゃ『速さ』が死んじまう」

「……合ってるわよ。3級の光具でも『準範士』が乗れば、逆に使い易いわね」

「化け物共をちぎっては投げちぎっては投げ、その中で遂に私は覚醒をし…」

「嬢ちゃんも知ってんだろうが、巌窟族の光具『防主』方陣はそうそう貫けるもんじゃねぇ。お前さん強くなるぜ」

「好条件ね。高々護衛で、しかも丸頭を守る為になんでそこまでやるのかしら」

「そして化け物に囚われた謎の美女を救いだ…あ、パルさんお茶ありがとうございます」

「はんっ、儂らの神聖な御山を、丸頭の血で汚したくないだけだ。なんだ嬢ちゃん、忙しくて“お使い”もできねぇのかよ？」

「へぇ、言ってくれるわね。あの“ケチ”で“頑固”で有名な四角頭が
随分太っ腹な話しをするから、本当に報酬が出るか心配になっちゃってね。

あぁ、見れば大した太っ腹よね」

「ふぅ…、パルさん今年の巌茶はいい出来ですね。この深い渋みうん、作り手の苦労が立派に報われていますよ」

「…」

「…」

「えぇ、全くそうですね。いやいや、そんな。本当の事ですよ。パルさんはまだ全然いけますって、グリゴスさんが居なければ私が」

「…」

「…」

「好感触、また、そんな事言うと私も本気を見せてしまいますよ。ははは、ついにゴートさん家のゴーン君も春が来ましたか。羨ましいですね」

「…」

「…」

「いえいえ、私なんて未だに男やもめですよ。いや本当。まぁ独り身が長かったですからね。あぁ、そうですね、ガーガリ君がね。それは困った…ぶわっくしょ」

「「うるせぇ（さい）！！！」」

「おぉう、何ですか二人して。て、もう話し合いは終わったんですか？」

「やぁかましぃぃぃぃ！お前が御山に入りたいっつーから儂が骨折ってやってるに、さっきからぺらぺらぺらぺら脳みそのねぇ話を喋りくさってからによぉ！」

「こっちは大事な話をしてんのよ！あんた、本当にやる気あんの？！」

「あのですね、ガーガリ君も今難しい年頃なんですよ？あの位の年の子は、手を出すのも、放っておくのも微妙な感じなんで加減がしずらいんです。どうしたモノでしょうかね」

「ガンスん所の糞倅なんぞどうでもいい！いいか！とっとと嬢ちゃん連れて
御山に行ってこい！これは儂が決めた！もう覆らん！これで仕舞だ！母ちゃん、儂が出る！ガンスん所のハナタレめが、性根叩き直してやる！」

「いってらっしゃい」と、パルに送られて怒って出ていってしまった。
呆然と見送るのは二人の男女、コリーが「はぁ…」と諦めた様に息を漏らした。

「しょうがないわね、山の護衛は引き受けるわ。で、その山って何処の？
とっとと行くわよ。あーもー頭痛い」

「え？え？」

フミアキを引き摺りながらコリーが家を後にする。そんな三者三様を
パルは笑顔で見送るのであった。

7話　旅で団欒（後書き）

用語解説？

バックアタック　後方から強襲される。これをやられると高い確率で後衛があぼんする。

光具ぬち　光具造りの職人の事。

槌（つち）を取り替えるな　巌窟族では自身の槌を大切にします。真新し槌は新人。古い槌は熟練工。槌を取替取替してるぬちは信用されません。

あー言やこー言う　あー言やこー言う。フミアキみたいな人。

光具3級　数字が若ければ若い程、なんかよくわからないけどすごくなります。

準範士　ぬちの職位。『　』＞範士（はんし）＞準範士＞教士（きょうし）＞錬士（れんし）＞弟子＞見習い

錬士から一人前。教士から弟子をとれます。

大抵のぬちは、教士までです。準範士は巌窟族でも２０人未満。

範士に至っては、２人です。

化け物と美女　フミアキの妄想。

ゴーン君　（岩窟族で）イケメン君、幼馴染のペートちゃんと散々じれじれした挙句、喧嘩→仲直り→春到来→リア充

ちね。

ガーガリ君　ペートちゃんに横恋慕するも、イケメンに撃破される。
根は悪い子ではないが、直情的過ぎる傾向がある。
振られたショックで絶賛悪中(ワル)。
グリゴスさんの鉄拳が飛ぶ。

暇を見て、各話のあとがきにて用語解説？を付け足していきたいです。
ご意見ご感想お待ちしております。

8話　旅で山

「本当にこっちでいいの？」

しっかりと踏み固められた土の上を歩く二人。
鉱山に続く幅広の道は、何十年も使い込まれカチカチになっている。

「えぇ、後は道なりの一本ですから迷う事はないです」

「何これ？こんなんで護衛なんて意味あったのかしら」

「そもそも鉱山の奥に行く訳ではないんですよ。
グリゴスさんもアレで心配性だったりするんです」

はぁ…と、コリーが呆れた溜息を着く。鉱山に続く道は穏やかであり、
何の危険の予兆も感じ受けない。まだフミアキに追いついた時の森の方が、
緊張感を持てたかもしれない。

今向かっている鉱山は、坑道が伸びきっていて全盛期の面影が見受けられない。
そんな若干寂れた鉱山だが、その分道は踏み固められ歩き易く

長年道に染み込んだ人の臭いから、獣も避けて通る為に安全と言えた。

「……あんたって、光具職人だったの？しかも準範士に認められる程の」

「いいえ、確かに趣味で少々光具を造りますが、私はぬちではありません」

空には神が鎮座し、今日もその熱を降り注いでいる。

「すごい褒め様だったじゃない。あたしは“偏窟族”が自分の所以外の種族を褒めた事なんて初めて見たわよ」

「コリーさん、余りグレゴスさん達の事を「四角頭」だの「偏窟族」など呼ばないで下さい。彼らは不器用ですが、気持ちが真っ直ぐないい人達です」

ピーチチッと野鳥が囀る。森は新緑の季節に伸ばした枝葉を方々に、光合成を勤しむ。

「はん！あいつらだって言ってるわよ「丸頭」「凡族（ぼんぞく）」ってね
まったく舐めんじゃないわよ」

「ははは っ、凡俗と掛けているんですね。いい得て妙とはこの事ですか」

バササと名も知らぬ野鳥が飛び立った。フミアキより背の低いコリーは
フミアキを睨（ね）め上げる形になる。その剣呑な空気は周囲を巻き込み
野鳥は避難を余儀なくされた。

「あんた……あたしに喧嘩売ってるの？」

「コリーさん、笑って受け流せばいいんですよ。“大人”はそうやって世を渡るんです」

それはまるで“子供”だと言ってる様に聞こえ、瞬間コリーの殺気が膨れ上がる。
何時の間にか二人の足は止まり、一方は睨み一方は見て視線を交差させる。

「巫山戯るな！巫山戯るな！巫山戯るなっ！あたしが女だからって舐めるのもいい加減にしなっ！」

「喧嘩も売っていませんし、舐めてもいませんよ。
もう少し肩の力を抜いた方が、心持ちが楽になります」

――ですから、と続けた言葉は、彼女の左手に握られたモノに寄って遮られる。

「…」

「……はぁ」

剣を突きつけられてるにも関わらず、顔色一つ変えずに溜息をつく。
普段キツイ突っ込みをするグリゴス、アイリは振るう力を理解している。
だがこの少女は、感情に振り回されている。年若い証拠でもありフミアキは頭を抱える。

（説教なんて柄じゃないんだけど、そもそも好き勝手生きてる自覚はあるし
年だけくっている奴に諭されたくはないよなー）

未だにこちらを睨みつける古色の瞳が、少し不安げに揺れた。

恐らく出した手を漸く理解し、その収めどころに困っているのだろう。

「……頭は冷えましたか？では行きましょう、まだ目的地にも着いてないので」

フミアキは面倒事を、後回しにしたようだった。

空気が重い、空は晴れ渡り周りは山々に囲まれ王都の様な騒がしさは微塵もない
実に牧歌的で心がゆったりとしてくるハズ、にも関わらず二人は無言のまま歩く。

鉱山の入口を通り過ぎ、山に沿って歩き始めるフミアキに声がかかった。

「…鉱山に用があったんじゃないの」

「あぁ、ここは坑道が伸びきっていて余程奥に行かないと
めぼしい物は採れないんですよ。これから向かうのは剥き出しになってる崖ですね」

暫く歩くと、切り立った山肌が見えてきた。

「ここは意外といい物が見つかるんですよ。私の秘密の場所なんです」

「…」

コリーが見上げる崖には、とても彼が言う様な「いい物」があるとも
思えない、普通の岩が剥き出しになっているだけであった。

「さて、ちょっと上まで行ってきますね」

――『韋駄天ブーツ』発動。怪訝な顔をしてるコリーを余所に、
『形ある紋言』を唱えると“崖を垂直に駆け上がって”行った。

「は？はぁぁぁぁぁ？！」

下から素っ頓狂な声が上がるも、凄まじい速さで駆けるフミアキには
聞こえなかった。中腹に出っ張りがあり、手を掛けて乗り上げる。

「ふぅ、よかった。まだ誰にも触られてないな、
確かこの辺に……あったあった、よっと、む、こっちに繋がってるか」

2年前までこう言う穴場を狙って採掘していたフミアキは、
目的の物をコツコツ掘り始める。鉱山に潜るより、外回りでちまちま採掘しはじめると意外に鉱物が見付かるのだ。
もちろん量は多くないのだけれど、趣味に使うだけなので十分だった。

小一時間程採掘に励み手の平大の塊二つに、それよりもずっと小さな塊を
懐に仕舞い、昔設置したロープを手に取り帰る支度をする。

「これでこの場所はほぼ採り尽くしたし、残りは三箇所くらいしか残ってないな。
まぁ、そんなに来ないし別にいいか……怖くない怖くない怖くない」

「ヒィィィ、高い、怖い、揺れるぅぅぅぅ！登るのは一瞬だけど

降りるのは本当に怖いいいい！！」

ロープに体重を預けるもたった一本しかない。翼のない生き物にとって
高所は恐怖以外の何者でもないし、気を紛らわす為に意味の無い事でも口にする。

「うぉぉぉ、風が風が！この悪戯好きの風さんめ！あ、ごめんなさい謝りますから揺らさないでぇぇぇ！などと男は訳の分からない事を供述しており、警察では余罪も含めて調査していくとの事です。以上、現場の崖より中継でした。えー、それではスタジオに戻ります――現場のフミアキさんありがとう。では次週の週間天気予報に移ります」

本当に全く意味がない、意外に大丈夫なのかもしれない。

「なんてぷぷぷっ、あぁこんにちわ。散歩ですか？
天気がいいし君達は自由に飛べて羨ましいですね。私も若い頃は空に憧れたものですよ、主に仕事に疲れた時なんかは……。
えっ、あの、ちょっと、何を。あ、ダメです！ロープつついちゃダメェェェ！」

騒がしくしたからだろうか、何時の間にか大きな鳥がフミアキの周りを飛び
しまいにはロープをつつき始めた。仲間の鳥だろうか、つついてる

鳥と一緒になり
ロープを啄みフミアキの顔が青くなる。

「え？え？更におかわりですか……。この旅が終わったら、私は可愛いお嫁さんを探すんです。それまで私はっ死ねない！」

鳥が寄って来た時点で降りる速度を早める。も、無情に鳥達が喝采を上げて最後のひと付きをする。

「オワタ」

頭上で人生を諦めたフミアキに対して、焦ったのはコリーであった。
大きな鳥が集まって来た時点で、コリーも嫌な予感をヒシヒシと感じていた。

「何やってんのよあの馬鹿は。……まさか落ちてくるって事はない

わよね」

自分で口にしながら予感を否定するも、フミアキが落下する様を見て手が動く。

「ああもう！えーっと…、紋言無理。陣だけでなんとか……？！」

高速で方陣を形成し、空陣を三つ四つと縦に重ねていく。
五つ目を創り始めたその時に、ドーン！とフミアキが背中から方陣を突き抜けて落下してきた。辺りに土煙が立ち上る。

「い、生きてる…の…？」

急いで近寄って生存を確認する。奇跡的にひどい怪我がないようでほっと息を吐き出すコリー。

「あいつが言った事がしみじみと分かるわ。森の件もそうだったけど一人で出すと本当にどうなるか分からないわね、これは」

しょうがないと言いたげに溜息をついてフミアキを抱える。

「なんだか馬鹿らしくなっちゃた。あーもーこいつ相手に緊張して

たなんて…
あたしの恥だわ。……って、何よこれ！なんでこんなに軽いのよこいつ！？」

若干女性としてのプライドを傷付けられながら、フミアキを背負いなおし
来た道を引き返すコリーだった。

8話　旅で山（後書き）

うーん、キャラの性格が安定しませんね。
書き直すかもしれません、漸く書けたので取り敢えず投下。

ご意見、ご指摘ありましたお願いします。

9話　旅で光具（前書き）

ずっと説明のターン。

9話　旅で光具

「やっぱり嬢ちゃんを一緒にやったのは当たりだったな」

「この馬鹿いつもあんな感じなの？首に縄付けてた方がいいんじゃない？」

「…まぁ、大体は間違っちゃいねぇ。矢鱈滅多ら地獄の釜の蓋開けやがる」

――それも自覚なしだ。と、苦い顔で締めくくる。
山から帰った二人を見て、正確には背負われたフミアキを見て
岩窟族の壮年の男――グリゴスが重い溜息を吐いた。

「いや、語弊があるか……なんつーかよ、確かにこいつが蓋開けてる事もあるが
大半が“勝手”に釜の蓋が開く……そう思える時がある」

「何よそれ」

「拾った当初からやけに事故が多い。気絶するくらいなら軽いモンだがよ
命に関わる奴が洒落にならんくらいに“遭う”…それでも何だかん

だで
生き延びてるからな。運がいいのかもしれん」

――それって。言葉を飲み込むコリー、部屋の空気の温度が下がった気がした。

「この話しはこれで仕舞だ。こいつを無事に連れ帰ってくれて感謝する。
報酬の光具は後日に渡そう、調整もせんといかん
それに、フミアキが鍛冶場に入りゃ暫くかかるからな」

腰を上げ、フミアキの採掘した鉱物を手に持ち「儂は頼まれた奴をやってくる」
そう言って部屋を後にした。
残されたコリーは、ベットに寝そべるフミアキを見つつ嫌な汗を拭う。
夏特有の熱なのか、それとも別のナニかのセイなのか、実に気持ち悪い汗だった。

「と、言う夢を見たんです」

コリーに起こされたフミアキは開口一番そう言った。

「…」

「おおぅ、その「何こいつ、いきなり馬鹿な事言ってんのかしら」みたいな目で見ないで下さいよ。寝起きになんて冷たい目をするんですか」

「「何こいつ、いきなり馬鹿な事言ってんのかしら」どうでもいいけど
ご飯が食べられるなら、パルさんが用意してくれるわよ」

「なんと…、態々口に出して言われてしまった。なんだか軽くあしらわれてますね
私昨日何かしましたか？」

「別に。ただ、戯言は受け流すのが“大人”なのよね？」

冷たく言い放つコリーは泰然としていて、どこぞのメイドを彷彿とさせる。

「笑ってが抜けてますよ……、一晩で急成長なんて少年漫画ですか」

――若いっていいですね。などと独りで零し寝間着を脱ぐ。
昨日は旅装だったが、パルが怪我の確認と一緒に着替えさせてくれた様だ。
フミアキが折りたたまれた昔の普段着を掴む、その視界の端にカーマインの髪と同じ位に顔を真っ赤にさせたコリーが見えた。

「あああああああ……」

「なんです、年頃の女性がそんな大口開けてみっともない」

年上らしくコリーを注意する。コリーはこちらを指差し口をパクパクさせている。

「あんたが！いきなり！脱ぐからでしょーーーーーー！！！
変態、変態、変態！あんたどの口が、あ、あたしが居るのよっ！！」

「と、言う割にはこちらをしっかり見ているコリーさんであった」

「うううう、うるさぁぁぁぁぁぁぁぁい！！」

顔を真っ赤にさせてすぐ近くにあった椅子を投擲。ふっ、まだまだ子供ですねゲフゥ。
などと最後の言葉を残し、二度寝に入るフミアキだった。上半身裸で。

「嬢ちゃん、確かにフミアキが悪りぃがよ…あんまし真面目に付き合うと
話が進まんぞ。ちったぁ我慢しろ、それか手加減して意識は残せ」

「五月蝿いわね！ちゃんと途中までは出来てたんだから！
何もかも、ぜーーーーーんぶこの変態が悪いんだから！あたしは悪くない！」

鼻息を荒くして反論するも、若干涙目の少女にこれ以上は酷かと引き下がる。
グリゴスもあまりコリーの事を強く言えないのは、同じ経験者の体験故だろう。

「しょうがねぇか、だが嬢ちゃん。ここからは儂の鍛冶場だ
勝手な真似はすんなよ。それとこれからフミアキが“つけいれ”の
作業に入るから、近寄るんじゃねぇぞ」

顎でフミアキを指したグリゴスに釣られ、コリーが鍛冶場のフミアキに
視線をやる。ここは鍛冶場と言っても「鉄を打つ」鍛冶場ではない。
巌窟族では、「鉄を打つ所」も「光具を刻む所」も引っ括めて『鍛冶場』と言う。

フミアキは今、人が五人程入れる正方形の部屋にて、光具造りの
一番の肝である“つけいれ”の作業に入っている。つけいれとは、
光具の元となる素材に直接方陣を刻み込む作業で、一番神経を使う
場面である。

「分かったけど、いつ始まんのよ。ずっと見てるだけじゃないの」

「もう始まってるぞ、手元よく見てみるんだな」

フミアキは手に棒の様な物を持ち、光具の元となる素材に定めた
あかい石を
つつくような動作をしている。

「？」

「分かんねぇか、まぁ分からんだろうな。今フミアキは、小指の爪より小せい
宝石に方陣を刻んでんのさ」

「はぁ？！そんなの有り得る訳ないじゃない！騙してるんじゃないわよっ！
小指の爪より小さい物？そんなのに方陣を刻めるハズない！まともに外陣すら造れない
小ささでしょ！」

「それをあいつはやってんだ、以前にトヨ豆に文字を書き込んでいたぜ？
馬鹿みてぇに小せえが、目を凝らして漸く見える、そんくれぇ器用だ」

「仮にその話が本当でも！光具造りって一瞬で終わるんじゃないの？！
確かに徒人族は、光具造りじゃあんた達に敵わないかもしれないけど…
これが巌窟族の御技って奴なの……？」

――説明してやるからこっちに来い。そう言ってコリーはグリゴ

スに
連れられてフミアキの部屋が見えるその場から移動した。

「簡単に言ってしまや巌窟族の伝古技(でんこ)でもねぇ。アレがフミアキの『外法』よ、つっても儂らとは違う視点の技術でしかねぇんだがな」

――年寄り共はかなわん。少し苛立たしげに履き捨て、厳茶を啜る。
場所を移し、お互いに対面で机の前に座る。パルが煎れた厳茶から渋く苦そうな香りが立ち上る。

「……どう言う事よ。あんた達の御技でもなし、あたし達の国伝技でもない
そんなぽんぽん新しい技術が、しかも光具のよ。出るハズないわ
それとも“三角頭”の？」

「いや、そっちでもねぇ……そうだなちょっくら長くなるが、話してやるか。
この光具造りの過程ってのは、三種族共にほぼ共通だ。これは間違いねぇ。
そもそもの始まりが『暗黒時代』の“おおきいもの”より儂ら含め三種族に齎(もたら)された技術だからな。細かい下準備が違うがよ
こりゃ交わる事のなかった為だからだ。だがよ、光具に刻むっつー根本の作業は決して変わる事はねぇ。乱暴に言ってしまや、方陣を物に篭める。
ただそれだけだが、儂らはその篭める、刻む作業を『おおち』って

道具を使う。
これは方陣を創る際の力を効率よく物に刻む、筆みてぇなもんだ。
あぁ、知ってるだろうが聞け。嬢ちゃんが言った様に、つけいれは一瞬で終わる。儂らぬちはその瞬き位の時間に命を懸ける。時間をかけ過ぎると
何故か光具に方陣が定着しねぇ。そんな短時間だ、刻める素材があんまりにも
小せぇと当然刻み篭めねぇ。そこで先祖が編み出したのが『拡縮法』
これは、素材よりでけぇ陣を小さくして刻み篭められるってー技法よ。
これにより、三種族の中でも光具と言やぁ巌窟族だと言わしめたモンだ。
続いて生まれたのが『重着法』だな。この技法が編み出された事で
二度、三度まで重ね掛けのつけいれが出来る様になった。これに寄り
儂らの種族は光具造りでは不動の地位を築いた。まっ、三度ってのは
範士くらいにしか出来んがな。儂が出来るのは二度までだ」

ずずー、と巌茶を啜り喉を潤す。

「でだ、『拡縮法』でも小指の爪程のモンに刻み篭めねぇ。
『重着法』使っても長時間続けて刻み篭めねぇ。
一瞬を二回、三回重ねるってのがこの技法の肝だからな。フミアキはよ、
あのまま、“一日一晩”掛けてつけいれす…」

「だからどうして！有り得ないんでしょ？！」

ダン！と机を叩く。湯呑みが跳ねた。

「当然の反応だがよ、少し落ち着け。嬢ちゃんはフミアキの光具を発動を直に見た事はあるか？」

「……あるわ。山で、いきなりあいつ“崖を駆け上がって”行ったわ」

「がっははは、どうだ非常識と思ったろ」

「当たり前よ！何よ、造りも非常識、効果も非常識……だから『外法』？
確かに認められないわ。こっちの常識が、積み上げた物が壊された感じよね」

「あいつはよ、儂らが線で刻むのに対して点で刻む。ひとつひとつ針で穴
開ける様にな、昔聞いたが『どっとえ』みたいなモンとか言ってやがった。
おまけに、本来なら外回りから刻み篭めるのが定石なんだが
それすらも無視だ。中から刻み篭んだ方が後の調整が効くとも言ってよ。
儂には理解出来んが、洒落臭くてフミアキのやる技法を真似てみた事があったが」

ずずずー、と湯呑を傾ける。

「驚いた…あの“偏屈族”が徒人族のを真似たなんて」

「それだけおどれーたって事だ。だがよ、座ってちまちまやってみたが
ダメだなありゃ。尻が馴染まない内に根を上げちまった。息が続かねぇ
今までの遣り方に慣れちまった身体には無理だったようでな。んで、
フミアキに詰め寄った。「お前はどこで光具造りを習ってきた?!」
「不細工なモンばっか造りやがって!」てな」

「不細工…?」

「ん?そうだな、あいつの靴は儂らから見れば欠陥品だ。あくまで儂らから
見れば、だがよ。フミアキの造った靴は効果はずば抜けてる、のにな、
ありゃ『形ある紋言』のみじゃ完全に効果を出しきらん。仕組みは分からんが
歩いた歩数を力に変える。なんてヘンテコな条件がある。あれだけ性能の
いい光具に態々縛りを付ける意味が分からねぇよったく」

「光具ってのは完全を意味する言葉でもあるんじゃなかった？
そんな余計な事して、逆によく発動するわね」

「そうだ、光具ぬちは常に完全を目指す。欠点が無く、不備が無く十全に効果を及ぼす。それが“光具”ってモンだ。それも含めてフミアキに
問いただした。そしたら奴はなんて言ったと思う？」

「…」

「笑っちまうぜ「完全な光具に興味はありません！りすくのある武具こそ
ろまんでしょう！はいりすくろーりたーん？笑止！はいりすくはいりたーんに
命を掛けてこその王道と言うモノです！魂が燃え尽きる程のくらいまっくす！
ぼーいみーつがーるしたかった…」とかなんとか、全く意味が分からねぇ！」

「？？」

「儂も、今の嬢ちゃんみたいな顔しとったんだろうな。本当に不思議でならねぇ
光具の知識はガキより無いくせに、無意味に刻んでる訳でもない。

フミアキはフミアキで、全く別の方向から光具を理解……してんだろう。
築き上げた技術も、積み重なる伝統も、あいつには関係ないみたいでな
そう思ったら、んか馬鹿らしくなった。儂ら、いや儂がやってた事は一体何だったんだろうとな。こんな歳になって正に目が醒めた気分だった」

岩窟族に生きた壮年の男の、独白だったのか語りだったのか
巌茶を一気に飲み干し湯呑みを降ろす。

「儂が言えるのは光具に絡むあいつのみだ、他に知りたい事があったら
直接聞くがいい。どうして嬢ちゃんがフミアキを“見てる”のか知らんが
正面切って聞けば、案外簡単に教えてくれるかもしれんぞ」

「……なんであたしに、徒人族にここまで教えてくれるの」

「何故だと？そりゃ嬢ちゃんが聞いてきたからだろう」

――がっはっはっは！まるで此方の答えを述べている様で肩透かす
フミアキの様な返事をしてグリゴスは席を立ち、部屋を出て行った。

まだ朝もやの残る中、村の入口には五人の人影が見えた。

「本当にお世話になりましたグリゴスさん、パルさん」

「フミアキ君、何時でも帰ってきていいのよぉ。おばさん待ってるから
あ、でも次はちゃんと連絡いれてねぇ、うんと美味しいもの作って待ってるから。
それと、健康管理はしっかりしなきゃダメよぉ。身体が丈夫じゃないと
何するにしても、始まんないんだからねぇ。フミアキ君、ただでさえ細いんだから食事はちゃんと食べるのよ？うちのひとみたく呑んだくれるのも
ダメよぉ、全くあのひとったらちっとも聞いてくれなくてねぇ。いくら
強いからっていい加減歳なのを忘れてるのよぉ、きっと何時か痛い目に合うわよ。
フミアキ君は賢いから、大変になってから気付くより、もっと先に分かっちゃうんじゃ
ないからしらねぇ。うふふふ、次来る時は可愛いお嫁さん連れて来

て頂戴よぉ。
おばさん楽しみにして待ってるから、そしたら岩窟族直伝の料理も作らなくっちゃね、あぁ、本当に楽しみだわぁ」

「母ちゃん……、いいから黙っとくれ。終わんねぇよ」

「兄ちゃん、今度来る時はもうちょっと居てよね約束だよ！
俺、秘密のお宝場所見つけたんだ！きっと兄ちゃんに負けない場所だからね！姉ちゃんもありがとう！また来てよね！」

「気が向いたらね、もうあんな危ない目に遭わない様に気をつけるのよ」

「おう嬢ちゃん、これが例の報酬だ。紋言と使い方は一緒に袋に入れてある
大変だろうと思うが、帰りのフミアキも頼むぞ」

「ふん、別に帰りが偶々一緒なだけよ。まっ、ついでだから頼まれてやるわ」

「なんだか二人とも、随分仲良くなりましたね。似た者同士、通じるモノが
あったんですか？」

「「誰が似てるって?!」」

「だぁ!合わせんな丸頭!」

「それはこっちの言葉よ、四角頭!」

頭を突き付ける様にして唾み合う二人に、三人から笑いが起こる。

「グリス君、グリゴスさんとパルさんの言う事をしっかり聞いて立派な光具ぬちになって下さいね。そしたら私の発見したお宝場所を教えますよ」

「うん!父ちゃんと兄ちゃんに負けないぬちになるよ!そしたら約束だね!絶対だよ!」

「ったく、ひよっ子のくせに生意気な口きくんじゃねぇ。おいフミアキ長老共の言う事なんざ気にするこたねぇからな。……あー、なんだ、身体にきぃつけろ」

「ありがとうございますグリゴスさん。拾って頂いた事から始まりずっとお世話になりっぱなしで…本当に感謝しています。

グリゴスさんも、くれぐれも身体に気を付けて過ごして下さい」

そう締め括り、フミアキとコリーはグリゴス一家に見送られ
朝の涼しさがまだ残る内に、五日間滞在した岩窟族の村を後にした。

9話　旅で光具（後書き）

５秒１０秒で考えた設定満載ですいません。
いろいろ付け足したり、用語解説してみたいのですが
時間が足りない…。

書けたからすぐ投稿のパターンですので
ご意見ご感想ありましたらお願いします。

１０話　帰還で首飾り（前書き）

漸く二桁目です。ファンタジーと銘打ってる割に
ファンタジーっぽくない様な気がしてならないですが、
読んで頂けたら幸いです。

１０話　帰還で首飾り

「この時を何度夢見た事か、苦難の道だった。何処までも続く道の上に
幾度も挫け心折れそうになっただろう…、だが私は負けなかった
意識を消される様な激しい攻撃を食らっても、その都度黄泉帰った
それは全てこの日を迎える為であり…！」

「黙んなさい周りに迷惑、注目引いて恥ずかしいのよ」

ドゴッ！コリーの一撃がフミアキの腹に鈍く刺さる。帰ってきた事で
気分が昂揚しているのか、演出過剰に捲し立てるもコリーが制する。
ここは王都に入るに一番大きい門の前、辺りを歩く人々は何事かと
二人に目を向ける。

「ぐふぅ、ゆ、油断した…まさか着いたと思う瞬間を、狙い撃ちするとはっ」

「五月蝿い黙れもうすぐ私達の番なのよ」

グリゴス一家に見送られ六日、二人は漸く王都まで帰って来た。
大勢の騎士達が門を守り目を光らせるも、二人を見る騎士の目は生
暖かった。

「そもそも、あんたが何度も気絶するのが悪いのよ。おかげですごい時間食っちゃったじゃないの」

「えー、まるで私が悪いみたいに言いますけど、気絶させてるのはコリーさんじゃないですか」

「あんたが！いつも！余計な事、するからでしょうがっ！」

「なんと言う理不尽…、でも手加減が随分上手くなりましたね今の攻撃も気絶までいかないにしても、心に残る打撃…将来が恐ろしい」

「あんたねぇ……」

フミアキの背中が後ろの誰かにつつかれた。「おぉい、前空いたから進んでくれんか」
コリーと話していたら、前の手続きが終わったようだった。

「あぁ、すいません。さ、私達の順番ですから行きましょうか」

膨れ上がって行きそうな怒気を誤魔化す為に、フミアキはコリー

の背中を押して
受付に荷物を一旦預ける。しかしここで首を傾げる。王都を出立した時は
ここまで物々しい警備の騎士は居なかったハズである。

「何だか物々しいですね、何かあったんですか？」

「ん？お前さん知らんのか、明日は第二王女様の誕生祭があるだろうが」

フミアキの手荷物を調べている中年の騎士が呆れながらも答える。
「王族の記念祭くらい知っとけよ」と言って注意されてしまった。

「コリーさんコリーさん、知ってました？」

隣で別の青年騎士に手荷物を見せているコリーに、こっそり尋ねるも
何今更こいつ言ってんの？みたいな顔をされてしまった。一般常識だったらしい。

「はっはっは、お嬢ちゃんも大変だなこんな兄貴を持っちまって！
よし、次は証明符を…」

中年騎士が破顔するも、コリーの眉が吊り上がる。
腹の底から声を絞り出す少女に、中年騎士の腰が若干引ける。

「あー…にー……？」

「ぷっ、い、妹は怒りっぽくてですね。私も苦労しているんで」

調子に乗ってフミアキが中年騎士の言葉を繋げる。限界ギリギリのコリーを
今このタイミングでつつけばどうなるか、言わずもがな。最後まで言い終わる前に
フミアキの両足が崩れ落ちた。どうでもいいが、後ろに並んでる人達が可哀相だ。

「これが証明符よっ、で、こっちがこの馬鹿の分！」

受け取った中年騎士が目を剥く。慌てて直立不動に構える。

「こ、これは！コーリネファン様とは露知らず、ご無礼を、い、致しました！」

「別にいいわよ、こっちも任務中だったし。第二級特殊監視対象のフミアキよ

照会はいいわね？」

「はっ！確かに確認しました、どうぞお通り下さい！」

最敬礼する騎士に野次馬の見物人を無視して、コリーはフミアキを引き摺りながらごった返す門を後にした。

「あれ…ここは…」

「漸く気付いたわねったく、人に背負わせて楽して、いい身分よね」

「ですから、気絶させるのはコリーさんじゃ…はい、すいませんです」

ギロリと睨まれカエル、これだと直ぐにグリゴスさんレベルまで

成長しそうだ。
と、零す事もなく心に思うフミアキだった。

「態々家まで送って頂きありがとうございます。あー、久しぶりの我が家だ」

「ふん、それじゃ確かに送り届けたし、巌窟族の依頼は果たしたわよ。
もう会う事もないだろうけど、あんまり巫山戯てどっかで死なないでよね」

「え？上がってかないんですか？」

「はぁ？何でよ」

「いやだって、コリーさんまだ用事終わってないんじゃないです？」

「だから！何言ってんのよ」

「アイリさんに報告しなければいけないんですから、ここで一緒に済ませておくと
二度手間踏まなくて楽でしょう？」

その言葉を受けて、コリーが身構える。ここはフミアキの借家、中には当然
メイドのアイリが主人の帰りを待っている、かもしれない。

「あんた…どうして」

「簡単な事です。アイリさんが教えてくれたんですよ」

「うそっ、本人には知らせないって…」

ニヤニヤするフミアキを見て、はっとコリーが口を手で塞ぐ。
柳眉を逆立て、やられたと言う言葉が脳裏を過ぎる。

「あー、やっぱりそうだったんですね。いや、そうじゃないかなーと思ってましたよ」

得意気に引っ掛けた事をバラすフミアキに堪忍袋の緒がどうにかなる。
自然な動作で剣を抜く。冗談では無く、頭に血が登り上がる。

「コロス」

「殺してどうする、この馬鹿者めが」

突如現れたアイリにコリーの剣が受け止められる。凛々しい声と共に
グラッシュブルーの髪が靡く。

「アイリー…！痛っ」

「簡単に暴走しおってからに、少しは成長するかと思ったらコレか腹が立ったら、服に隠れている場所か後の残らぬ方陣を使えと言っただろう」

頭頂部を抑えてうずくまるコリーに説教をするアイリ。やはりその顔は
出立時と変わらず無表情だった。先ほどまでの教官然とした喋りではなく
普段の丁寧な口調に戻しフミアキに綺麗なお辞儀をする。

「フミアキ様に至っては、健勝の様で安心致しました」

「ただいま戻りました。でも、前の言葉が無ければ
もっと嬉しかったんですけどね…あははは」

「そうですか、もう暫くすれば我が主が参られます。
旅の埃を落として身を清潔にして下さい」

つまりは、薄汚れた姿でクーの前に立つな。と言う事で
そのままフミアキは風呂場に直行した。背中が若干哀愁を誘う。

「何時までそうしているつもりだ。とっとと報告をしろ」

「うぅ…アイリーン様、すごく痛みが残るんですけど…」

「ここではアイリだと言っただろうが。お前も主が参られる前に
身支度をしておけ、そのままの姿で拝謁なぞ私が許さん」

口調が変わろうとも、至上主義に掲げている主への扱いは変わり
はしない。
出来の悪い部下を躾る様に振舞うその姿は、この館のヒエラルキー
の頂点に
君臨する冷酷な女帝そのものだった。ただしクーは除く。

「…もう遅いか。流石は我が主」

「…は？」

「いい、どうやらもうすぐ到着する様だ。お前の報告は主と共に聞こう」

どうやってか、クーの到着を予感しコリーの仕事を下げる。
ここからは、アイリのメイドとしての仕事が始まる。彼女の主を持て成す事は
あらゆる仕事の上、最優先に位置付けられる為である。

「先生帰って来たんだってーーー！？」

バッターンと扉にダメージを与えつつ、クーが参上した。

「もー！先生何処にりょこ…」

言葉が続く意味を口が飲み込む。そしてフリーズ。

「おや、クーですか。こんにちわ、ん？どうかしましたか」

わわわわわわ…、などと不明瞭な羅列がクーの口から出てくる。わ、が連続する度にクーの顔に朱が差す。

「何ですか、言いたい事があるならしっかり言って下さいよ」

「わーーーーー！！先生の変態ーーーーッ！！」

アイリに言われた通りに汚れを洗い流して、着替えてる最中だった。
それでも下は履いていたのは、せめてもの救いだっただろう。

「んあで、しょ斎で着替えてるのぉ！？」

「アイリさんに言われて風呂に入ってたからであり、上着がこっちにあったものですからね。実に完璧な説明」

――別にいいじゃないですか。と、布で頭をごしごししながら書斎を歩く。乱雑に拭き終わり、いつもの上着に袖を通し話しを続ける。

「君と私の仲ですから」

「え？え？！そ、そんな…仲だなんて…先生何言ってるの」

クーが茹でリンゴの様な顔にまで紅くして俯いた。
フミアキはもう一度布で髪をふきふきしている為に気が付かない。

「同性に見られるくらい何とも無いですからね。
ふぅ、さっぱりした。って、随分と面白い顔になってますけど
大丈夫ですか？」

「あー…、うん、ソウダネ。ナンデモナイヨ？」

呼吸困難に陥る前に、なんとか復活したクーが硬く首を振る。
どうやらまだ動作不良が起こっている様で、見かねたアイリが
助け舟を出す。

「それでフミアキ様、旅ではどちら迄足を運ばれたのですか？」

「おぉぅ、久々の感覚。そして何時の間にか注がれてる紅茶
言わずもがな、サイレント・ティーである」

「変な固有名詞はお止めください」

「前のパターンと全く一緒ですね。…それで旅ですか、別に私が言わなくても、コリーさんから聞いないんですか？」

「旅の話しと言うモノは本人の口から聞くのが醍醐味です。あの子の話しは“報告”ですから」

「それは、味気ない話ですね。よろしい、私がこの旅で体験した話を語りましょう。あれは…」

フミアキが旅を語り、夏の日晴れた午後、クーは嬉しそうに話に聞き入り、アイリは変わらず無表情で紅茶を継ぎ足していた。

「…先生、気を失いすぎじゃない？」

話終わりも、もちろんコリーに気絶させられ気が付けば館だった
その事でクーには呆れられた。呆れられながらも心配してこちらを
覗くのでフミアキは何でもない、と言う様に返す。

「それだけ周りの突っ込みがきついだけですよ。
まぁ、体力がないのは自覚してますがね。少し運動でもするか」

「なら散歩などは如何ですか。少しづつ歩いて体力を付けるのも
宜しいかと存じます」

「なんだかさ、病人の予後生活みたいだね。うふふッ」

「言ってなさい、君も３０過ぎたらこんなになるんですよ」

「えー、そんな訳ないよ。これでも身体はよく動かしてるし
先生よりも強いんだよ！」

「そんなひょろい腕で言われても…、普段私がご飯を食べてない
みたいに言いますけど、君も大概じゃないですか」

「ひゃぁ！いきなりへ、変なとこ触らないでよ！」

「うーむ、ぺたぺたすべすべ、これが１５才の肌か…
羨ましいですね。こちとら二の腕の弛みが…肌のクオリティ
下がりまくりですよ」

「あ、あんまり触らないでよ…それともう１６だからね」

プンスカと言う音が聞こえそうな感じでクーがちょっと
怒った様にフミアキに掴まれた腕を振り払う。

「そう言えば、誕生会は何時でしたかね？」

「言ってなかった？明日だよ」

「へぇ、確か第二王女様も明日でしたね。ん？
あれ第二王女様もクーと同い年で１６でしたか？」

「あ、あれー。偶然一緒だね。うん、偶然に一緒だったよ。
そうそう、明日の準備もあるし帰らないと…」

何故か慌てた様に両手をバタバタ振って居るクーに
フミアキが思い出したように「ちょっと待って下さい」と

言って、旅で使ったずた袋を漁り始めた。「あったあった」と
フミアキが小さな白い袋をクーに手渡す。

「これを渡しておきますよ」

「何これ？」

「えぇっと、普段からお世話になっていますからね
感謝の気持ちと、お祝いのちょっとしたモノです」

「なるほど、ソレを作りに態々岩窟族の村に行っていたのですね」

「そうだったんだ…、ねぇ先生開けてもいいかな？」

「君の為に造ったんですから、どうぞ開けて見てください。
あぁ、でも、素人の造ったモノですからね。気に入らなかったら
すいませんです」

「先生が自分の手で作ってくれたんでしょ？それだけで
嬉しいよ。何があるんだろう…」

――うわぁ！うわぁ！と、クーが歓声を上げる。クーの手に

乗っているのは小さなアミュレットにチェーンを足してネックレスにした格好で、銀細工のクロスが二重の輪還を背負った構図になっている。
中央にはカットされた紅い宝石に、フミアキが方陣を刻み篭んだ例の石が鎮座していた。

「すッごいよコレー！見た事ない銀細工だね、え？あれ…これって」

「なんだ、もうバレてしまいましたか」

――もう少し気が付かないかと思いましたよ。と、苦笑しながらフミアキがニヤける。クーのエーバーグリーの瞳がより一層の歓喜の色を濃くする。

「わ、分かるよー！だってコレ、勇者ボルドーの守護宝石でしょ？！」

「当たりです。挿絵で一枚だけしか登場しなかったのによく覚えてますね」

「先生の本は隅々までしっかり見てるんだからね！やったー！これ、勇者ボルドーとお揃いだよ！」

「絵は白黒で分からないと思いますが、真ん中の石の色だけは違うんですけど
後は大体同じになる様に造れたと思いますよ」

「そうなんだ。でも何で色を変えたの？」

「うーん、クーですから白とか透明色でもよかったんですが
何故か、紅色が一番しっくりする。そう感じたんですよ
でもやっぱり、色が気に入りませんでしたか？あんまりこう言うのは
詳しくなくて、流行と言うのもよく分からないですし…」

「そぅなんだぁ…ううん！全然そんな事ないよ！
ありがとうね、先生！大事にします！」

本当に嬉しいと言う事を身体一杯に表現してくれるクーに
フミアキもまんざらでも無い様に微笑む。

「フミアキ様、折角ですからクーエンフュルダ様に首飾りを
直接付けて差し上げては如何でしょうか？」

「ふぇ？！いいよ、態々悪いよ…」

「クーだって自分で付けられるでしょう？何でしたらアイリさんが

付けてあげればいいんじゃないんですか？」

――はぁ…。とはアイリ、クーは「うぅ…」などと呻いている。

「あれ？私何かしましたか？」フミアキは首を傾げるだけだった。

そんな和やかな空気の中、コリーだけは扉の外で入るタイミングを完全に失って頭を抱えていたのは、アイリだけが知っていた。

１０話　帰還で首飾り（後書き）

読んで頂き有難う御座います。
ご意見ご感想ありましたら宜しくお願いします。

実は話が収まり切らなかったので
残りは次話に回します。いろいろ悩みますね。

１１話　帰還で陣（前書き）

たった方陣の説明で終わってしまった話し。
ロクに設定詰めてなかったので、過去最高の駄話に…
最初に謝ります、ごめんなさい。

11話　帰還で陣

「やっと落ち着いたと思ったら、なんだか外が騒がしいですね」

フミアキが窓の外を見やると、無数のランプの光が方陣の燐光があちらこちらで揺れ動いていた。王都と言えど、まだこの地の人間の文化スピードは緩い。そして、闇は未だに深く濃く世界を包み込む。闇の中、数多くの人間が各々の光を持ち寄り、夜を徹しての作業に励む。

「明日は国民が待ち望んだ、第二王女様の誕生祭です。祝祭への準備は遅くまで掛かりましょう」

「そんなモノですか。まぁ、私にはどうでもいい事ですけどなんですか、第二王女とやらは人気があるようですね」

「フミアキ様、不敬罪に取られかねないお言葉です。ご注意を、それと第二王女様は、“連なりし系譜”よりその御色を濃く受け継がれ、歴代最高の円環陣の御繰り手とも名高くその貴き身分で在りながらも、決して机上に収まらず御身を似って民にその慈愛を施される様な気高きお方です」

「曰く、朱銀の癒士手（いやして）、弱者の庇護者、永遠の慈悲、“ゴードベールド”の再来、いやはやすごい、にしても

アイリさんは第二王女様の話しには随分饒舌になりますね」

「…徒人族とは、王族に従うべき人族の呼称で」

「別に悪い事ではないでしょう？むしろ私の様な敬意を払わない者がおかしいと思いますよ」

「…」

第二王女について熱く語るアイリに、おかしなフォローを入れるフミアキ、自覚があっても治す気は全く無い様だ。

「しかし、クーも大変ですね。第二王女様と誕生日が一緒とはやっぱり明日は第二王女様の誕生会に参列してから自分の誕生会なんでしょうか。貴族なら行かない訳にはいきませんよね。体裁が必要な身分の人は本当に大変でしょう」

「そうですね…」

「あぁ、でも今の王様は子供が二人とも女性でしたか。なら明日は権謀術数のどろどろの王宮内で、王女様方の心を射止める為に、すごい事になってそうですね。クーならきっと王女様に気に入られると思いませんか？」

「…」

「でも、天真爛漫で純粋なクーには厳しい戦いになりそうですね。他人を蹴落とす、なんて事出来そうにないですから心配ですね」

「…ふぅ」

多分に呆れが含まれた溜息がアイリから零れる。無表情なその顔には

「ダメだこいつは」と言う言葉が珍しくもハッキリと浮かんでいた。ダメだこいつと思われているフミアキは、会話の流れの一体何処に呆れられる要素があったのか首を捻っていた。

「そうそう、アイリさんにもお土産があるんでした」

無理矢理会話の流れを変え、フミアキが思い出したと旅のずた袋を漁り始めた。目的の物を見付けたのか、椅子を立ちアイリに近づき長方形で角の丸い小箱を差し出した。

「これは？」

「まぁ、開けてみてください。きっとアイリさんの役に立ちますよ」

言われるがままに小箱を手に取り、開けて中を確認する。
フミアキの驚かせてやろうと言う顔に、警戒心が首を擡(もた)げる。

「これは…、眼鏡…気付かれていましたか。ですが申し訳ありません
私の目は、治癒方陣でも治らなかった程です」

「もう目の事は諦めていると？」

「……はい、未練は既に断っております」

搾り出すように言葉を吐露するアイリに、フミアキは首を振る。

「ならついでに、諦める事も諦めて下さい。その目の症状は治りま
す。
ただ、時間が掛かるだけですよ」

「何を根拠にその様な事を」

「ここで不肖フミアキのっ、解説タァーーイム！どんどんパフパフ！
あ、止めて下さい。そんな冷たい目で見られて悦ぶ趣味はないので

…」

「…」

「こほん、真面目に解説しますと、徒人族の固有方陣に関係します。知ってると思いますが、現在の主な固有方陣は三種類。長耳族の三角を基本とした『森羅の陣式』、巌窟族の四角を基本とした『防主方陣』、
そして徒人族の円を基本とした『癒々方陣』これは、円環陣とも言われるんでしたね。それぞれの特性として森羅のは攻撃に優れ、防主は名の通り鉄壁の守りを持ち、そして癒々方陣は治療に秀でている。
ここで最初の話しですが、徒人族は『治癒』と言う現象に只管に特化しています」

「それは使用している私が一番理解しております。けれども、治癒だけでは
ありません。長耳族には及ぶべくもないけれど、属性を操る方陣も開発が進んでおります」

「えぇ全くその通りです。でも疑問に思った事はありませんか？
徒人族は、治癒方陣を基礎に置き攻守共に安定した方陣を持って居るのに
他の二種族は、治癒関係の方陣を開発出来ていないんですよ」

「どの種族も、方陣技術の秘匿は共通事項ですから…」

「いいえ、数百年と言う長い時間、それに徒人族の行動範囲の広さそして居住地の開拓の為の移住、守秘を貫く事など不可能なのです。秘密は秘密に成り得ない、約束事は必ず破かれるのですよ。では何故？答えは簡単、他種族では治癒方陣は扱えない。これに尽きます」

「確かに流出した技術もあるかもしれません、ですが他種族が治癒方陣を扱えないと言う事は信じられません。長耳族の方々が治癒方陣を使用した場面を目にした事があります故」

「それはですね、治癒方陣に似た現象であって厳密には治癒方陣ではありません。昔し、旅先で会った長耳の人に直接聞いたからまず間違いありません。詳しく違いを述べたいのですが、バレたら怒られてしまうので言えませんけどね。おっと話しが逸れましたか兎に角、徒人族の扱う『癒々方陣』は他種族の使う治癒方陣とは一線を画している。こう言う事です」

「それで、フミアキ様の仰る通りだと致しましょう。その事で最初のこの目がいずれ治るとのお言葉の意味は？癒々方陣を掛け続ければ目が良くなると？」

「癒々方陣は、外向に限り完全と言っていい治癒効果を齎す事は知

って
いますよね。ですが内向には、殆どと言っていい程意味を成さない。
切り傷、擦り傷、火傷に四肢切断、綺麗に治ってくっつきます。
ですが、腹痛、頭痛、捻挫に打撲、良くて痛みを和らげるくらいで
完治させる事ができませんね」

「お待ち下さい。内痛程度、直ぐに治る様な事に治癒方陣を
使うなど、大袈裟に過ぎませんか」

「んー、やっぱり気付いてないのですね。いいですか、他種族の方と
方陣を使えない徒人族の方々は、身体の中の痛み、内痛は簡単には
治りません。まぁ、程度の差はありますがね。方陣正しく言えば、
円環陣が特殊な効果を使用者に齎していると仮定していいでしょう」

「つまりは方陣で治す、のでは無くて、方陣を使用する事で
勝手に治る、そう言いたいのですか？」

「今までの説明をたった二行にまとめるとは…、恐ろしい子…！
こほん…円環陣を使用する際に、身体に流れる力を自覚しているハ
ズです。
あの力が、使用者の元々持っている治癒力をも高めているんですよ」

「なるほど…と、言いたい所ですがフミアキ様。残念ながら
私は、この目が一向に回復する兆しが見えません。今までも
方陣は使っていて、です」

「私をよく氷漬けに使ってましたね。それは、円環陣の特殊作用は指向性の無い力であり、身体の中を巡るだけなんですよ。ですから、局所的に作用するって事がないんですね、これが」

「今まで話していた事はなんだったのですか…」

「そこでその眼鏡に帰るんですが、掛けている最中に限り円環陣の特殊作用が眼鏡に集まり、眼鏡を通して目に取り込まれるとそう言うカラクリになっています。欠点は、方陣、円環陣を使わないと治癒効果が無い。目を限定にしか回復は作用しない。先天性の場合も効果が見込めない、悪くなった場所を元に戻すそう言った作用を利用してますからね。確認ですが、その目は後天性のモノで、外部からの何らかの衝撃を頭部に受けた事で視力が弱まった、間違いありませんか？」

「…仰る通りです。以前の任務にて戦闘中強い打撃を頭に貰ってしまい、御陰で前線からは退く事を余儀なくされました」

ギリッと、歯が軋む音が聞こえる。余程その当時の事が憎かったのだろう。
それでも表情が変わらないアイリは、怖いの一言でしかない。

「抑えて抑えて、恐ろしい顔は止めましょう」

「襲撃者には相応の傷を与えたので、痛み分けでしたが…
あの怪しげな隠形術、結局は破れずこの様な目になってしまいました」

「ほらほら、笑顔笑顔。折角の美人さんが台無しですよ。
と言うか、私が怖いんです。腰抜けるので殺気抑えてくれませんか…」

訥々と話しているにも関わらず、部屋一杯に殺気が充満している。
フミアキでなくとも、正直倒れかねない程の強さであった。

「一つお聞きしたいのですが、今まで披露した知識は
一体何処で学ばれたのですか？厳窟族の知識では無いハズです」

「へ？私はむしろ、何故方陣に対してこんな事も分からないのかが
分からないですね」

先程までの無作為に放たれていた殺気が、指向性を持った瞬間だった。

「そう！余りにも近くて気付かない事もありますよね！ね！

灯台もと暗しって正にコレですよ！あ、そうだ！その眼鏡ですが
使い方、使い方を教えましょう、教えさせて下さいお願いします！」

「……まだ全てを信用している訳ではありません。
ですが、話しに嘘がある様にも思えませんので。この目が治るなら、
もう一度我が主の側で剣を振るえるのなら、何も望みは致しません」

殺気を鎮め、眼鏡を見つめ直す。試しに耳に掛けみるも
あまりの軽さに少し戸惑いを覚える。アイリが見た事のある
眼鏡の印象は、分厚い縁にこれまた厚い鏡面と、如何にも
野暮ったいモノだったからだ。フミアキに渡された眼鏡は
縁が無く鏡面も薄すぎた。

「これ程薄くて、眼鏡としての体をなさないのではありませんか？」

「これは視力の悪い人の眼鏡ではありませんからね。今回は
アイリさん専用で造りましたから、普通の眼鏡でないのは当たり前
ですよ。
まずは、眼鏡の真ん中を指で抑えて『デフォルトモード』と言って
下さい」

「……分かりました。『でふぉるともーど』」

眼鏡が、鏡面が一瞬淡く光を放つとピタリとアイリの肌に

吸い付く感覚を味わう。驚き眼鏡を外そうとするも、取れない。

「何ですか、これは！」

思わず声を上げ、体験した事も無い奇妙な感覚に戸惑ってしまう。

「そうそう、それで装着された事になりますので、逆立ちしてもズレないんですよ。ふっふっふ、中々苦労したんですよ？その状態で、なんでもいいので円環陣を描いてみて下さい。え？なんでソレを私に向けるんですか？あれ？」

言われるがまま方陣を空に描く。標的はモチロン、フミアキである。決して癪に触ったからと言う理由ではない。ハズ。

「……クッ！？」

アイリの描いた空陣から漏れた燐光が、眼鏡に吸い寄せられる様にして集まってくる。瞬間眼鏡自体が光ったかと思うと、今まで霧がかかった様な視界が突如消え失せた。後には、以前の晴れ渡った目に室内の風景が収まる。

「こ、これは…一体…」

「どうやら問題なく発動した様ですね。結構骨の折れる作業でしたがキレイに光具が作動してくれてよかったよかった」

「これが光具…？いえ、確かに以前と同じくらい、それよりも視界が綺麗に見えます。コリーの報告に合ったのは…いや、だが…これだけの現象を引き起こすには…」

「今までハッキリ見えなかった分、よりキレイに見えるんでしょうね。先程のカラクリはですね、使用者の創り出した方陣の力を眼鏡に刻んだ方陣が吸い取り、眼鏡から方陣を直接眼球の奥のレンズ、水晶体を通り越しの、視神経にダイレクトに映像情報を送り込んでいるんですね。角膜、水晶体、どちらが悪くなっているのかは判断しかねますので方陣を直接当て癒やしを促進させつつ、映像情報をクリアに機能させつつの両得を実現してみました。あと面白い機能も付けてみてますから小箱を見てください、着脱の紋言とその他の説明事項が書いてあります」

混乱している所に、畳み掛ける様にして説明していくフミアキだが、

アイリには光具の発動時の混乱と感動が相まって、理解するよりも一層の混乱を引き起こしただけだった。

「申し訳ありません、もう一度…」

「それと、ここでのメイドさんも終了ですね」

アイリの言葉を遮り、フミアキが言い切る。その顔は何時も通りの草臥れた三十路すぎの男の愛想笑いだった。

「行き成り何を仰っているのですか…」

まるで意図が分からない、先ほどの理解し難い光具の発動原理、立て続けにアイリの解雇宣言、ただただ困惑する。

「何をって、それを掛けていれば目は見える、半年もすれば元通りに見える様になるでしょう。アイリさんはクーの側に居る事を望んでいる。
ならばもうここに居る意味はないのでしょう」

「……それは、そう…ですが」

「それともここが、いや、私が気に入ってくれたんですかね。
いやー、参っちゃいますね、こんな若い子に好意を寄せられるなんて、
私もまだまだ捨てたものではないですね。婚約の“連環の契”でも宣誓しましょうか」

不意にアイリの指が動く、描く、発動する。あっと言う間にフミアキは氷の彫像となる。

「今までお世話になりました。本日この時間を持ちましてお暇を頂きます。
フミアキ様にはご壮健でお過ごし下さい」

優雅にメイド服の裾を広げ、作法に習った見事な一礼を披露し退室する
アイリ。部屋に残ったのは完全に覆う氷に包まれたフミアキだけだった。

アイリの去った後、途端に氷が弾け飛ぶ。脆く薄いガラス細工の様に
跡形もなく砕け散る。フミアキの胸元、光を帯びた一点に吸収される様にして
床を汚す事なく完全に消え去った。

「これで全て元の鞘に収まったかな。やれやれ、若い人の相手は

大変だー、あー、背骨ぽきぽき鳴るわこれ。問題はアイリさん帰した事で、クーになって言われるやら…。ふぅ…」

もうこの館にはフミアキ以外だれも居ない。外からは相変わらず騒々しくも、活気に溢れた喧騒が夜の闇に響くだけだった。

１１話　帰還で陣（後書き）

お読みいただいて本当に本当に有難う御座います。
この話し書くだけで、ほぼ一週間潰しました。
自分の納得する物を書くってむつかしいんですね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9638x/

異世界で物書き

2011年11月29日01時53分発行